

**八尾市文化財調査報告37
平成8年度公共事業**

八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ

1997.3

八尾市教育委員会



『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ』正誤表

箇所	誤	正
P. 1 18行目	意味で意味が	ものとして意味が
P. 3 16行目	土器21点	土器19点
P. 8 第3区5.	淡灰シルト粘土	淡灰色シルト粘土
P. 10 第16図8.	粘質土シルト	粘土質シルト
P. 12 7-2	暗灰茶色粘砂	暗灰茶色粘砂(砂多)
P. 33 9項目	ヒラミガキ	ヘラミガキ

はじめに

八尾市は、広く生駒山西麓から大阪平野にかけての範囲に市域を有しております。古くは河内湖、河内潟に面し、多くの河川が流れ、肥沃な平野が形成されてきました。ここには旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には八尾市の公共事業に先立つ遺構確認調査の成果の一部を収めております。竜華地区の都市整備に先立つ試掘調査によって弥生時代から古墳時代の遺跡の広がりが明らかになった久宝寺遺跡や、新たに古墳時代前期の遺跡の存在が明らかになった植松南遺跡、古墳時代から奈良時代にかけての密な遺構、遺物の出土した小阪合遺跡をはじめ、非常に貴重な成果が得られました。

しかしながら、これらの調査はほとんどが、開発を前提とした記録保存のための発掘調査の事前の遺構確認調査であり、これらの成果は遺跡の破壊という大きな代償のうえに得られたものであることは言うまでもありません。

今後、八尾市の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれるかたちで、保存・活用がなされいくことが、緊急かつ重要な課題となっております。本書が微力ながらもその役割の一端を担うことができれば、幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にご協力、ご助力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成九年三月

八尾市教育委員会
教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成8年度に八尾市教育委員会が公共事業に先立ち、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 調査は八尾市教育委員会文化財課（課長 寺島正男）が実施した。
3. 調査にあたっては八尾市教育委員会文化財課技師 米田敏幸、道斎、吉田野乃、藤井淳弘、吉田珠己が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査について、その概要を収録した。
5. 現地調査・報告書の作成にあたっては、以下の諸氏の参加・協力を得た。

浅井紀己子・池田茂樹・岡一雅・奥田敏昭・片山武志・木村典子・島田豊彰・高橋尚子
灰藤秀樹・日高智隆・藤中貴子・堀本昌弘・松尾実・横山妙子・吉岡幹浩・米原洋文
6. 調査一覧表及び報告書抄録の作成は本課技師 藤井淳弘、吉田珠己が行った。
7. 本書の作成にあたっては、本課技師全員が執筆・編集を行い、文責は文末に記した。

本文目次

1. 跡部遺跡（95-675）の調査	1
2. 跡部遺跡（95-633）の調査	3
3. 植松南遺跡（96-641）の調査	6
4. 老原遺跡（96-148）の調査	9
5. 大竹遺跡（96-250）の調査	11
6. 楽音寺遺跡（95-588）の調査	13
7. 久宝寺遺跡（95-565）の調査	15
8. 小阪合遺跡（96-369）の調査	40
9. 太子堂遺跡（96-575）の調査	45
10. 中田遺跡（95-22）の調査	47
11. 竹瀬遺跡（94-478）の調査	50

図版目次

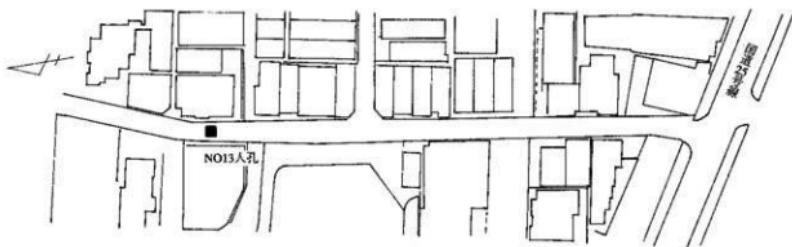
- 図版1 久宝寺遺跡（95-575）
調査風景その1（西より東を望む）
調査風景その2（第15区）
調査風景その3（第15区）
- 図版2 久宝寺遺跡（95-575）
第5区 庄内式甕出土状況（河川堆積中）
第7区 流木出土状況（N R 701）
第8区 布留式甕出土状況（河川堆積中）
第9区 須恵器出土状況（S D 901）
第11区 弧状溝検出状況
第15区 調査風景
- 図版3 久宝寺遺跡（95-575）
第1区 掘削風景
第1区 土師皿出土状況（S X01）
第1区 S K01土器出土状況
- 図版4 小阪合遺跡（96-369）
出土遺物
- 図版5 久宝寺遺跡（95-575）
出土遺物
- 図版6 竹渕遺跡（94-478）
出土遺物

1. 跡部遺跡（95-675）の調査

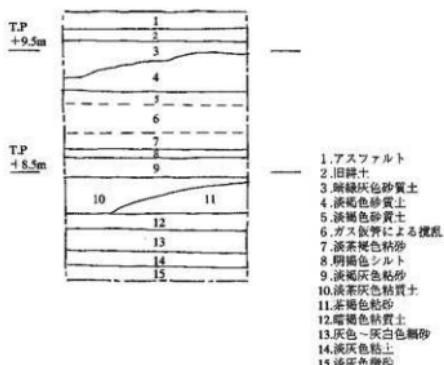
1. 調査地 跡部本町3丁目、太子堂5丁目
2. 調査期間 平成8年5月29日
3. 調査方法 下水道管理設に伴い遺構・遺物の有無を確認するために、人孔部分で立会い調査を実施した。
4. 調査概要 今回はNO13とする人孔部分で立会い調査を行ったが、矢板が立てられており、しかも、ガス、水道の既設管があったため、一部の土層観察を行えず止まった。
- 現況の道路面から旧の耕作土までは15cm程度しかなく、元々の地表面が高いことがわかる。遺物は約1.2mの淡褐色粘砂層から土師器片が確認される。そして地表下1.65mの暗褐色粘質土層からは土師質の小型壺（第4図）が出土した。壺はほぼ完形で口径8.4cm、器高5.85cmを測り、全体にナデ調整を行っている。また、地表下1.78mの灰色～灰白色細砂層には須恵器片が含まれていた。
- 出土した小型壺のみでは明確な時期をあたえることはできないが、頸部を強くナデ段をつくっていることから、7世紀以降のものと考えられる。本調査地点から東へ約80mの地点で（財）八尾市文化財調査研究会が行った調査（AT83-2）では平安時代末から室町時代の遺構が検出されており、また西へ約200mの地点で行われた調査（AT92-8）では、奈良時代の井戸が検出されている。このようしたことから本調査地でも奈良時代から平安時代にいたる遺構面が存在していることが推定される。今回の調査は立会い調査であったが、上記の二つの調査を結ぶ意味で意味があったものといえよう。
(消)



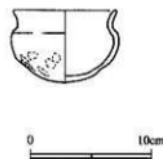
第1図 調査地周辺図 (1/5000)



第2図 調査位置図 (1/1000)



第3図 土層断面柱状図 (1/40)



第4図 出土遺物実測図 (1/4)

5. 参考文献

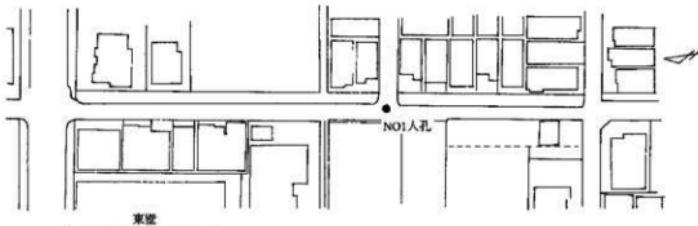
- (財)八尾市文化財調査研究会「跡部遺跡 (A T 83-2)」『昭和58年度事業報告』1984
タ
「跡部遺跡 (A T 92-8)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1983

2・跡部遺跡（95-633）の調査

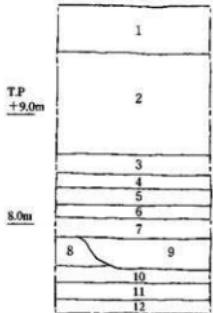
1. 調査地 太子堂1丁目地内
2. 調査期間 平成8年7月4日
3. 調査方法 下水道管埋設に伴い円形のライナーを用いる人孔部分を対象に遺構確認調査を実施した。ライナーは直径2.0mを測る。
4. 調査概要 調査開始時点では地表面から約1.15mまで掘削されており、これ以下を土層観察を中心とした調査を行った。堆積層は粘土質であり、これに砂礫ないしは砂が混じる状況が見受けられた。
- 遺構が検出されたのは地表下2.1m前後（TP +7.9m）の暗灰色砂混粘土で、溝あるいは土坑の一部とみられるが、大部分が調査区外に伸びるため全容は不明であり、その性格もわからない。そのためここでは落ち込み状遺構としておきたい。遺構は西肩を検出しており、東に向かって落ち込んでいる。検出幅は約1.25mを測り、埋土は淡灰黒色シルト混粘土である。また多くの炭化物が含まれていた。出土遺物から布留式期の遺構と考えられる。
- さらにベース層の下部にある淡緑灰色シルト層中で表面にタタキをもつV様式系の土器片が1点はあるが出土しており、周辺に遺構の存在が推定される。
5. 出土遺物について ここでは落ち込み状遺構から出土した土器21点を図化した。1～8は甕であるが庄内甕1を除いて、他はすべて布留系甕（2～8）である。いずれも頸部から口縁部にかけての部位のみで、体部以下の形状は不明である。しかし、布留系甕の口縁部の形状をみてもバラエティーに富んでいる。2は「く」の字状の頸部からわずか



第5図 調査地周辺図 (1/5000)



第6図 調査位置図 (1/1000)



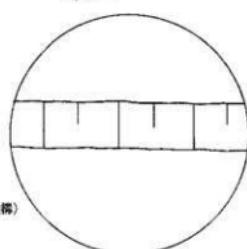
第7図 土層断面図 (1/40)

に外湾し、端部もやや丸い。3は鈍く屈曲する頸部から口縁は上外方に伸び、端部はわずかに外側に肥厚し、外傾する端面をつくっている。また口縁内面にはハケメがみられる。4は「く」の字状の頸部から口縁が内湾気味に立ち上がり、端部は外半して丸い。こうしたことから2~4は布留式傾向の壺といえよう。

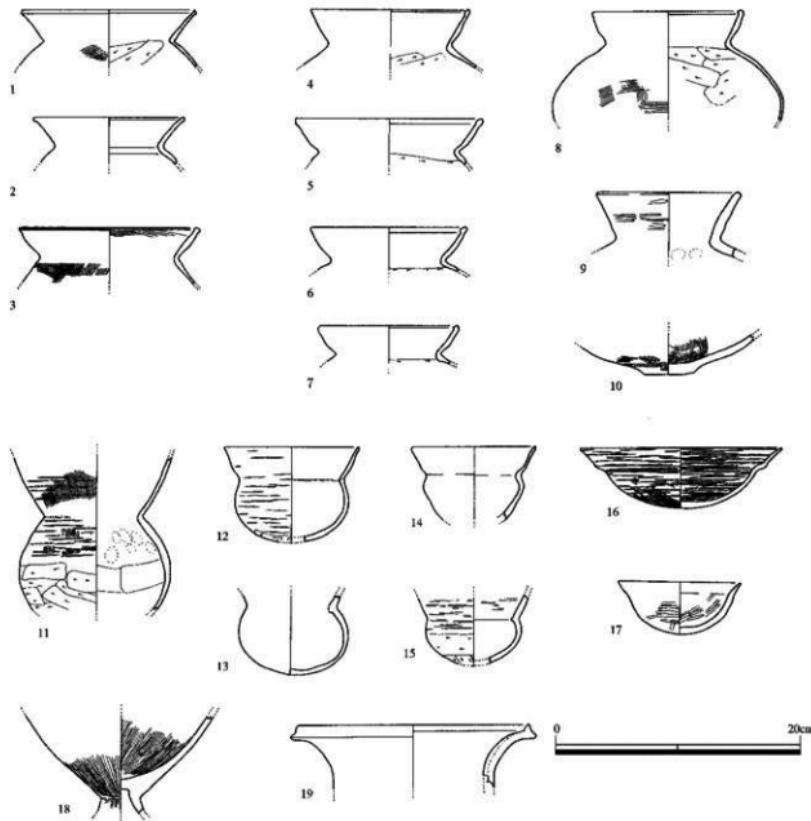
5~8は布留壺で、「く」の字状の頸部から口縁は内湾しながら立ち上がる。端部は内側に肥厚し、内傾する端面をなすもの(5~7)と内側に丸く肥厚するもの(8)がある。

壺は短頸壺(9・10)・直口壺11・小型丸底壺(12~15)がある。短頸壺9は外面をヘラミガキし、頸部内面には指頭痕が残る。10は外面がヘラミガキ、内面にハケメが見られる。9と10はいずれも乳白色で、同一個体と考えられる。直口壺11は球形の体部から上外方に内湾しながらのびる口縁部をもつ。外面は口縁から体部上半にかけてはハケ後ヘラミガキで、下半部はヘラケズリを施す。内面は体部上半は指頭痕、他はナデである。淡橙褐色を呈す。小型丸底壺はいずれも口径が体部径を凌駕するものである。12・13は球形の体部をもつもので、色調は淡橙褐色。12は外面はヘラミガキを行い、底部はヘラケズリがみられる。13は剥離のため調整不明。14は頸部付近を強くナデしており、体部が逆台形に近い形状である。外面はヘラミガキ内面はナデで、外面にススが付着している。15は半球形の体部に発達した口縁をもつもので、外面は口縁から体部上半部はヘラミガキ、下半部はヘラケズリ、内面は口縁部をヘラミガキ、体部はナデである。

鉢は有段鉢16と短い口縁部をもつ小型の鉢17がある。16は口径16.6cm、器高4.9cm。17は口径10cm、器高4.4cm、口縁はナデ、体部は内外面ヘラミガキである。



第8図 遺構平面図 (1/40)



第9図 出土遺物実測図 (1/4)

高杯18は「ハ」の字状の脚部に上外方に高く伸びる口縁部をもつもので、内外面ともヘラミガキを施す。色調は暗橙褐色を呈す。

器台は口径18.8cmを測り、淡橙褐色である。

以上の特徴から落ち込み出土遺物は布留式期でも古相に比定できよう。

6. 備 考

太子堂1丁目から西の跡部本町1丁目の直線距離にして約500mの間に庄内式新相～布留式の遺構、遺物の出土が顕著である。太子堂1丁目より東の春日町から東太子町では銅鏃に代表されるように弥生前期から後期の集落を中心とし、古墳後期の遺構も検出される。こうしたことから弥生時代の集落と布留式期の集落は成り立ちそのものが異なっていたと推定される。また、遺構も布留式期のみで後の時代の遺構が同地点で余り検出されていない。こうした時期別の集落移動の条件は判然としない。ただ今回はこうした問題を考えていく上で布留式期の遺構の範囲を認識する資料を提供できたものといえる。

(道)

3. 植松南遺跡（96-641）の調査

1. 調査地

南植松町3丁目50

2. 調査期間

平成8年11月25日・26日

3. 調査方法

環境施設課からの依頼に基づき、龍華火葬場建替予定地内に、約4m四方の調査区を4ヶ所（第1区～第4区とする）設定し、遺跡範囲確認のための試掘調査を行った。機械掘削と人力掘削を併用して、地表下4m前後までの調査となった。

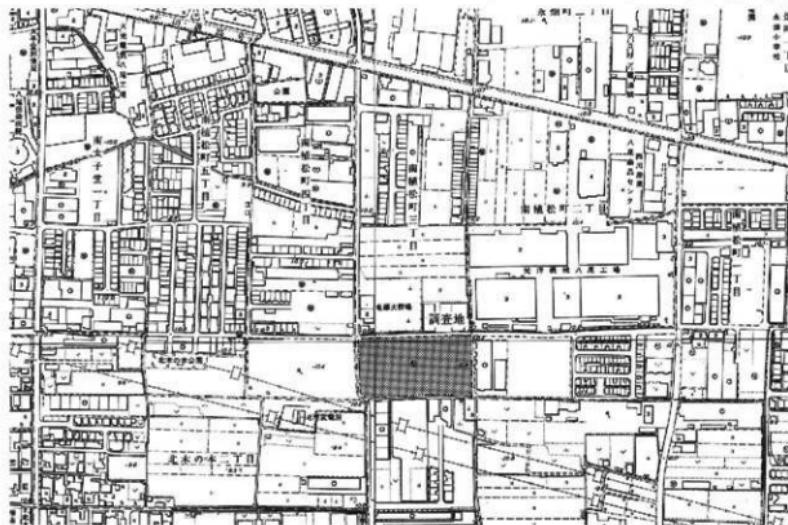
4. 調査概要

第1区－ 表土以下地表下1.35mまでは、コンクリート等による盛土及び擾乱層が続く。そして、地表下1.35m以下で遺物の確認できた層は、地表下2.6mより地表下4mを越えて続く灰白色細砂～粗砂層による河川堆積がある（これを河川1とする）。出土遺物は、少量の土師器細片のみである。

第2区－ 表土以下地表下1.6mまでは、コンクリート等による盛土及び擾乱層であった。以下、地表下2.8mより掘削深度であった地表下4mを越えて灰白色細砂～粗砂層が続く。出土遺物としては、土師器片がある。この層は、第1区で確認した河川1に対応するものと考えられる。

第3区－ 表土以下地表下1.4mまでは、コンクリート等による盛土及び擾乱層であった。地表下1.4m以下で遺物の確認できた層は、河川1の堆積である地表下2.9m～地表下3.2mまで続く灰白色粗砂層がある。第3区では、第1区・第2区と異なり、河川1の河床が確認できた。調査区北側に行くにつれて、河川1の堆積は少なくなっているようである。若干の土師器細片が出土している。

第4区－ 表土以下地表下1.1mまでは、コンクリート等による盛土及び擾乱層



第10図 調査地周辺図（1/5000）

であった。そして、地表下1.95m～2.1mにおいて、須恵器片や土師器片を含む明褐色細砂層がある。さらに、地表下2.9mから地表下3.2mまで続く河川1の堆積層である明褐色粗砂～細砂層があり、須恵器甕片や土師器片などが出土している。

河川1の粗砂層直下の地表下3.2mより0.4m前後の層厚で、土師器片や弥生土器片等を含む暗灰色粘土層を確認した。出土遺物から古墳時代前期ごろの遺物包含層であると考えられる。

5. 調査のまとめ

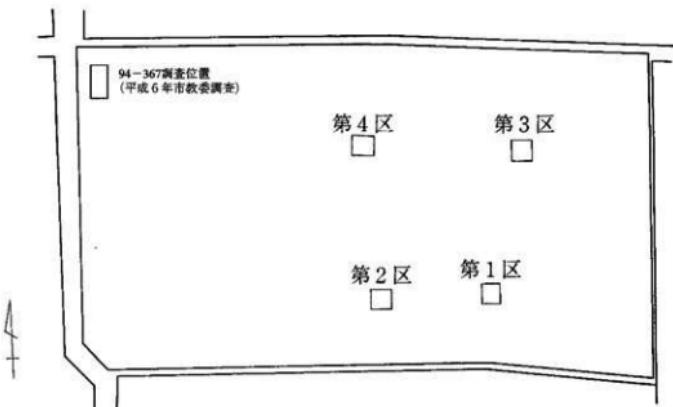
1. 地表下2m前後（TP +9.0m）において、調査区全域に堆積する層厚約0.2m前後の細砂層を確認した。時期については不明である。おそらく、中世以降の洪水砂と考えられる。

2. 地表下3m前後（TP +8.0m）において、第1区～第4区すべてで古墳時代後期以降に堆積した河川堆積の粗砂層を確認した（河川1）。第1区・第2区では河床を確認できなかったが、第3区・第4区では河床を確認しており、北へ行くほどその堆積は少なくなることがわかる。このことから、調査区南側に広がる東西南向の流れの河川が存在する可能性がある。

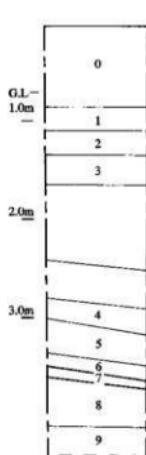
3. 第4区では、地表下3.2m（TP +7.75m）において、古墳時代前期ごろの遺物包含層を確認した（層厚約0.4m）。これに対応すると考えられる遺物包含層は、今回の調査地の西側での八尾市教育委員会の平成6年度の調査（[94-367] 調査区設定図参照）においても確認されている。この調査では、地表下3.6m前後の黒灰色炭混粘土層で検出されており、層厚は約0.1m前後であった（[94-367] 土層模式図参照）。

これらの調査成果から該期の何らかの遺構等が、調査区周辺に存在していると考えられる。

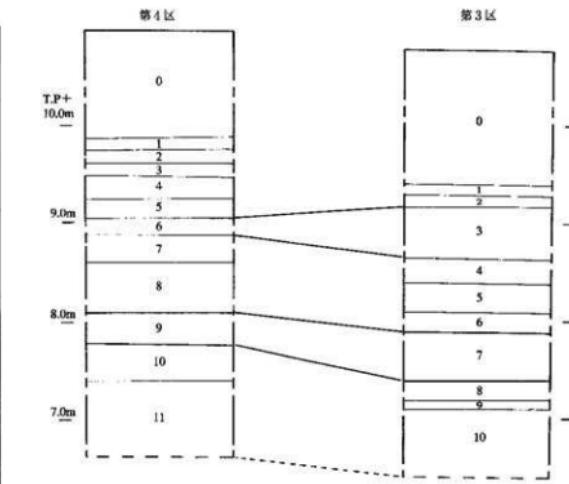
（藤井）



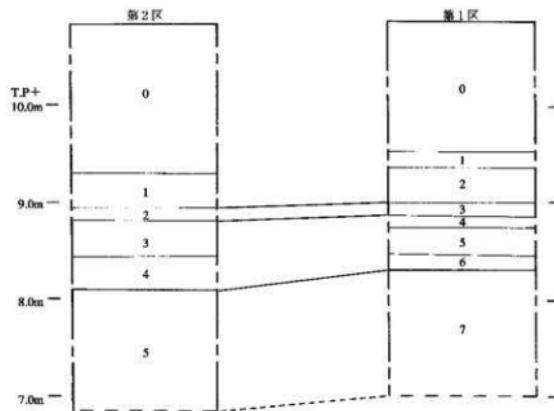
第11図 調査区設定図 (1/1000)



第12図 94-367土層模式図 (1/50)



第13図 土層断面図 (1/50)



第1区

- 0.底土
- 1.暗灰色粗砂混粘砂
- 2.緑灰色粗砂混粘砂
- 3.灰褐色細砂
- 4.暗灰色シルト
- 5.暗灰色シルト粘土
- 6.淡青灰色シルト粘土
- 7.灰白色粗砂～細砂

第2区

- 0.底土
- 1.青灰色粗砂混粘砂
- 2.灰白色粗砂
- 3.暗灰色粗砂混シルト粘土
- 4.暗背灰色シルト粘土
- 5.灰白色粗砂～細砂

第3区

- 0.底土
- 1.暗灰色粗砂混粘砂
- 2.灰灰色粗砂
- 3.暗灰色粗砂
- 4.暗灰色シルト粘土 (褐色粒混)
- 5.淡灰シルト粘土
- 6.暗青灰色シルト粘土
- 7.灰白色粗砂
- 8.淡灰色粘土
- 9.暗灰色粘土
- 10.淡灰色粘土

第4区

- 0.底土
- 1.暗灰色粗砂混粘砂
- 2.灰灰色粗砂
- 3.暗灰色粗砂
- 4.暗灰色粗砂シルト
- 5.淡灰シルト粘土
- 6.明黄色粗砂
- 7.明黄色シルト
- 8.淡褐色シルト粘土
- 9.明褐色粗砂～細砂
- 10.暗褐色粘土 (古墳時代前期包含層)
- 11.淡褐色粘土

4. 老原遺跡（96-148）の調査

1. 調査地
 2. 調査期間
 3. 調査方法

老原1丁目地内

平成8年10月17日

道路新設工事に先立ち、造構確認調査を行うために調査区3ヶ所を設定した。第1区、第2区に関しては約2m四方の範囲で、第3区は約1m×約2mの範囲で、それぞれ地表下約2mまで調査を行った。

第1区— 現耕作面より約0.7mが盛土部分となる。以下、地表下約1mの青灰色粘砂シルト層中より、少量の土師器片や瓦器片が出土している。そして、地表下約1.15mにおいて遺構面と考えられる淡灰褐色粘砂質土層を検出した。遺構としては、東西方向の小溝の一部を検出した。遺物は確認できなかった。遺構面の時期については中世ごろと考えられる。さらに、地表下1.4m付近の青灰色微粘砂層の直上より、土師器片や瓦器片が少量出土している。

第2区— 現耕作面より約0.6mが盛土部分となる。以下、地表下約1mより土師器片等を含む茶褐色粘質土層を検出した。この層からは、「て」の字状口縁の小皿(1)、土師皿(2)、瓦器椀(3)等が出土している。おそらく平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけての遺物包含層もしくは遺構内の覆土と考えられる。地表下1.4m以下は、灰白色細砂層と暗灰色粘土質シルト層が続く。この層からは、遺構・遺物は確認できなかった。

第3区— 地表下約1mまでは、盛土及び搅乱層が続く。そして、地表下1mから1.2mの間に近代～近世の陶磁器を含む茶褐色粘質シルト層を確認した。しかし、



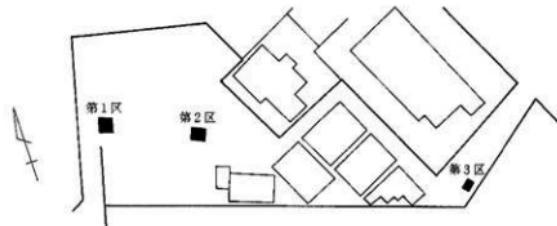
第14図 調査地周辺図 (1/5000)

以下地表下2m前後まで、第1区や第2区で見られた中世の遺物包含層や遺構面は確認できなかった。

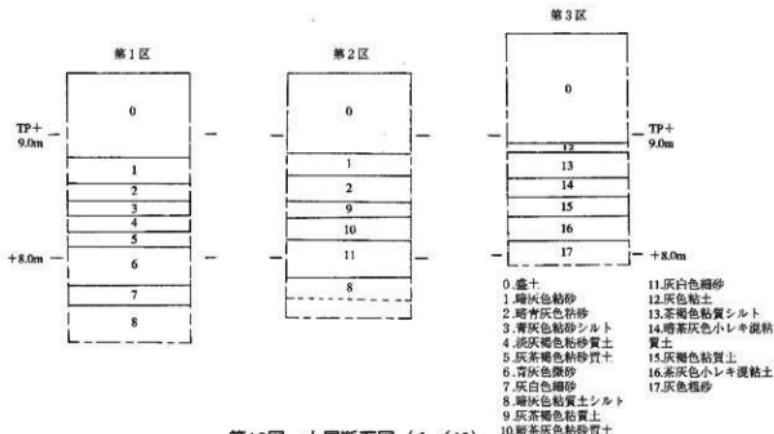
5.まとめ

第1区・第2区において、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけての遺物包含層・遺構面を検出した。この結果は、本調査区の西側で行われた平成7年度の八尾市文化財調査研究会の調査結果（原田1996）と同様の成果であると考えられる。しかし、いわゆる五条の宮に関連する遺構や遺物は確認できず、今後の周辺の調査での検出を期待したい。（藤井）

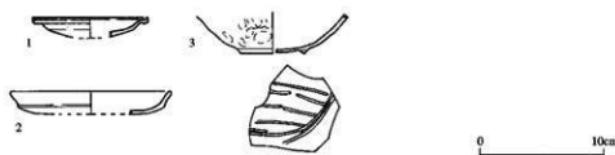
参考文献 原田昌則 1996「5.老原遺跡第6次調査(OH95-6)」「平成7年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」



第15図 調査区設定図 (1/1000)



第16図 土層断面図 (1/40)



第17図 出土遺物実測図 (1/4)

5. 大竹遺跡（96-250）の調査

1. 調査地 八尾市大竹5・7丁目地内
2. 調査期間 平成8年7月26日、8月6日
3. 調査方法 道路改良（人孔設置）に伴い、人孔部分3ヶ所を対象に遺構確認調査を行った。それぞれ管底付近まで重機と人力を併用して掘削を行った。
4. 調査概要

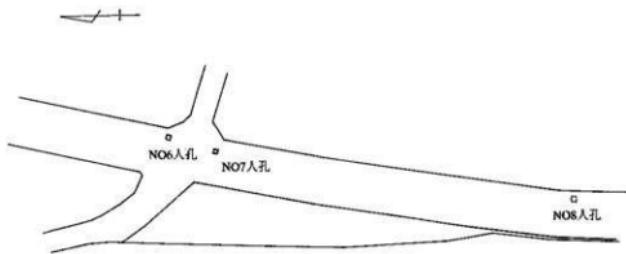
〔NO 6人孔〕 地表下1.8mまで確認を行った。地表下1.2m～1.35m、TP 33.2～33.4mの茶灰色砂質土中から時期不明の土師器小片1点が出土した。この層には径10cmまでの花崗岩の角礫が含まれており、心合寺山古墳の外堤の葺石に関連するものかもしれない。

〔NO 7人孔〕 地表下1.7m付近まで確認を行った。地表下1.35～1.7m、TP 32.85～33.3mの暗灰色粘性砂から時期不明の土師器小片が出土した。

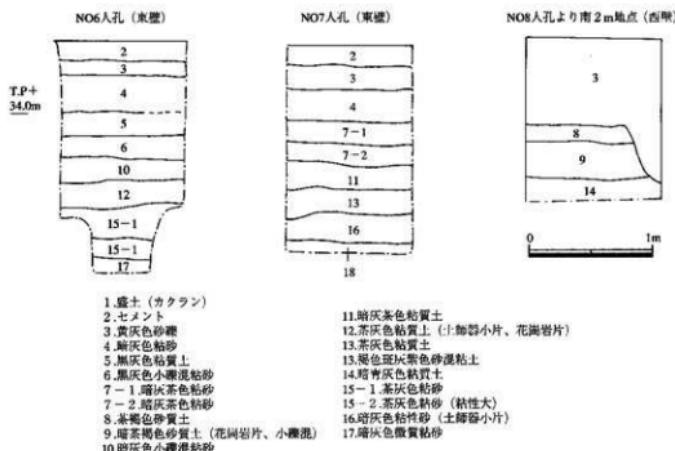
〔NO 8人孔隣接管路部分〕 人孔部分の湧水が激しいため、人孔の南2m地点で地表下1.35m付近まで掘削を行った。地表下0.85m～1.15m、TP 33.45m～33.75mの花崗石の小礫を含む暗茶褐色砂質土層から土師器小片が出土した。
- 5.まとめ 昭和59年度に行なった心合寺山古墳東側推定外堤部分の発掘調査では、TP 32.0～32.6mで中世の堤の盛土とみられる土層を確認している。さらにその下で外堤に使用されたとみられる葺石を含む土層を確認している。今回の調査区は掘削した最も深い部分でTP 32.68mであった。今回の調査では心合寺山古墳の推定外堤部分に関連するとみられる遺構は確認できなかった。ただ土層中にみられた花崗岩の角礫片は外堤の葺石に関連する可能性もある。(吉田野乃)



第18図 調査地周辺図 (1/5000)



第19図 調査区設定図 (1/600)



第20図 調査区土層断面図 (1/40)

6. 楽音寺遺跡（95-588）の調査

1. 調査地

八尾市楽音寺7丁目地内

2. 調査期間

平成8年1月9日

3. 調査方法

道路改良（管路設置）に伴い、遺構確認調査を行なった。施工予定地西端の道路を隔てた南側では、昭和60年度に円墳の周濠部とみられる遺構が確認されており、周濠内から川西編年V期に位置付けられる円筒埴輪片や、6世紀末に位置付けられる須恵器が出土している。今回の調査ではこの古墳の周濠部の想定延長部分を中心に管路幅で長さ5.5mの調査区を設定した。

4. 調査概要

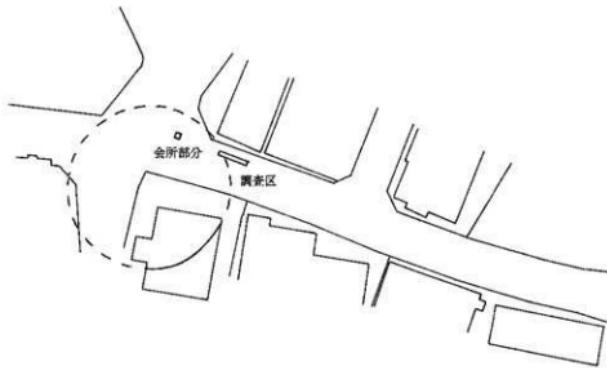
地表下0.6m～0.8mまで、アスファルトの下に現代の盛土層が堆積しており、この下には灰黄色砂質土層、灰色砂礫層、黄褐色粘性微砂層等が堆積するが、これらの層には全く遺物が含まれておらず、地山とみられる。調査区の西壁近くで、灰黄色砂質土層上面より切り込む灰茶色粘性砂質土を確認した。断面確認であったが、東西幅1.2m、深さ0.1mを測る。遺物は確認できなかった。昭和60年度に確認した周濠部に関する可能性があるが、昭和60年度確認の周濠埋土は黒茶色粘土であり、異なる。さらに昭和60年度調査地の現況の高さは、今回の調査地の灰黄色砂質土層上面付近の高さとなる。当時の地表の高さは現況とは異なるものであったかもしれないが、当時は地表下0.5m前後で周濠の埋土を確認している。今回の調査区はでのありかたは、古墳の墳丘裾が地形にあわせて東側が高く設定されたために既に削平を受けていたか、もしくは当初から東側には明確な周濠を設けていなかった可能性が考えられる。いずれにしても調査区が狭小なため、判然としない。なお、北側会所部分で立会を行ない、地表下1.6mまで確認したが、既設管の埋め戻し時の真砂土であった。

（吉田野乃）



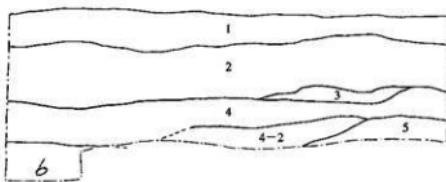
第21図 調査地周辺図（1/5000）

△△



第22図 調査区設定図 (1/600)

西壁



0 1m

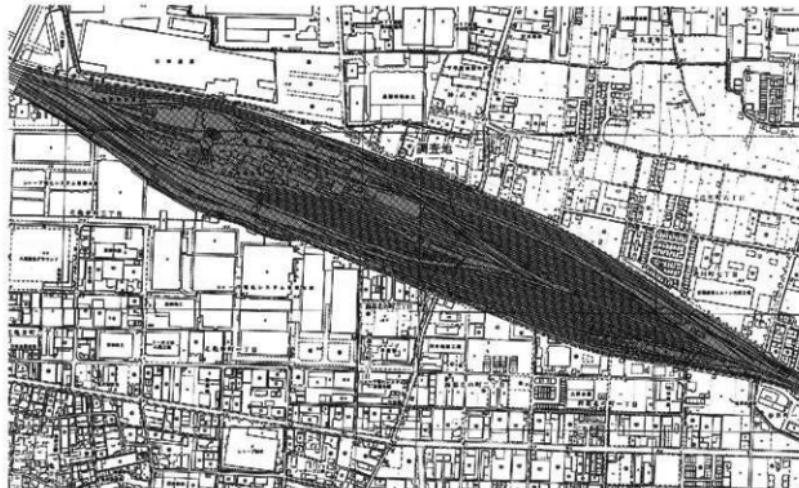
- 1.アスファルト、砂利敷
2.暗緑色膠泥粘土（盛土）
3.灰系色粘性砂質土（周辺埋土？）
4-1.灰黄色砂質土
4-2.灰黄色砂質土（粘性少、色透明い）
5.灰黄色砂質土
6.黄褐色粘性砂質土

地山層

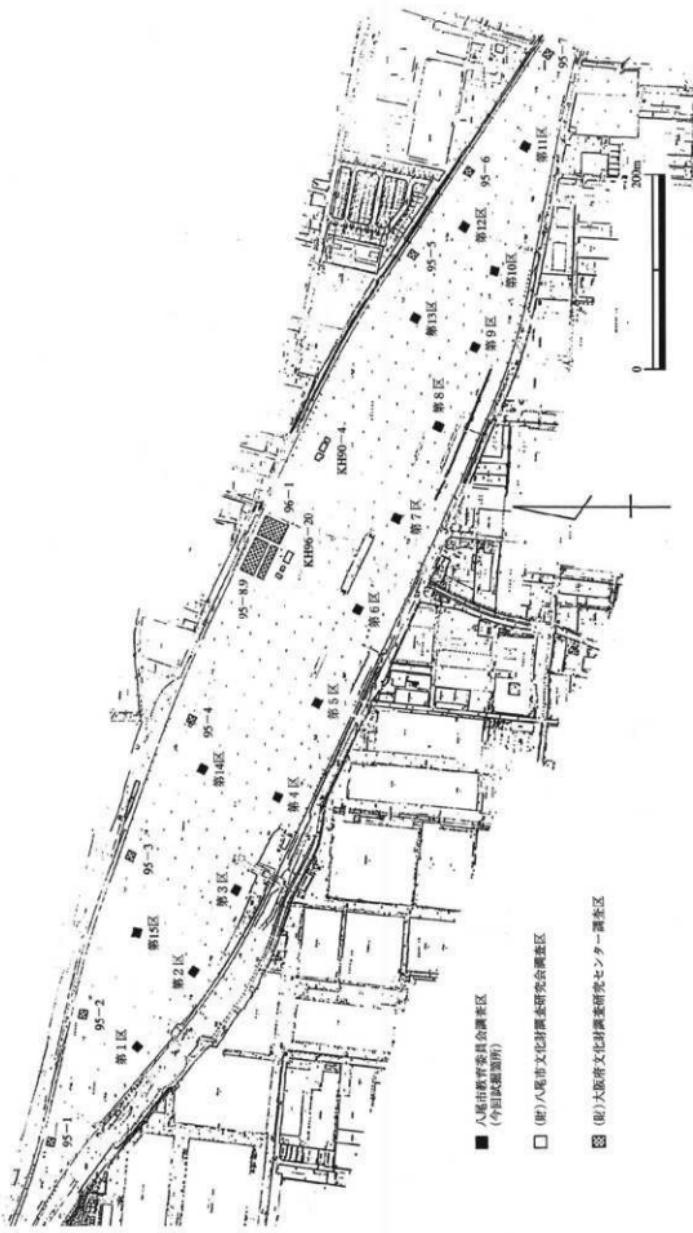
第23図 調査区土層断面図 (1/40)

7. 久宝寺遺跡（95-565）の調査

1. 調査地 大字渋川及び亀井地内
2. 調査期間 平成8年1月9日～3月26日（第1区～第8区）
4月8日～7月12日（第9区～第15区）
3. 調査方法 龍華地区都市拠点整備室の依頼に基づいて、龍華地区の都市拠点整備に先立ち、龍華操車場跡地内の遺構確認調査を行うために、試掘調査を実施した。矢板の打設された4m四方の調査区をおよそ100m間隔に15ヶ所設定した（調査区設定図参照）。そして、盛土層1m前後を重機で掘り下げ、以下を人力掘削によって、地表下約6mを掘削限界として試掘調査を行った。
4. 調査概要 第1区—盛土以下TP6.3m（地表下1.7m）までが、近現代～近世の水田耕作による土層であることを確認したが、以下掘削限界まで時期を確定できる遺構、遺物を認めることができなかった。
- しかし、TP4.8m（地表下3.2m）の灰色粗砂層直下のオリーブ黒色シルト質粘土層において、長辺約20cm、短辺約10cmの楕円形のくぼみ状の痕跡（人か動物の足跡？）を20数点検出した。さらにTP4.0m（地表下4.0m）のオリーブ黒色粘土層においては、洪水砂で埋もれた立木の根株を数本検出している。それぞれ、ある時期の地表面であると考えられるが、時期については不明である。
- 第2区—盛土以下TP6.6m（地表下1.5m）までが近現代の水田耕作による土層で、TP6.6m以下TP6.2mまで（地表下1.5m～1.9m）で中世の遺物包含層を、またTP6.2m以下TP5.8mまで（地表下1.9m～2.3m）で弥生時代後期の遺物包含層を確認した。TP5.8m（地表下2.3m）以下については、TP5.0m（地表下3.1m）



第24図 調査地周辺図（1/12000）



第25図 調査区設定図(1/5000)

前後およびTP3.0m（地表下5.1m）前後で、厚さ0.8~1.5mの二次堆積による粗砂層が確認できたが、微量の土器碎片（弥生時代中期および縄文時代の土器と考えられる）が含まれるもののが顕著な遺構・遺物を認めることはできなかった。

第3区—盛土以下TP6.4m（地表下2.0m）までは近現代～近世の水田耕作による土層で、遺物も土師器片など少量であった。そして、TP6.4m以下TP6.0m（地表下2.4m）まで遺構・遺物は認められなかった。

TP6.0m以下TP5.4m（地表下3.0m）までのオリーブ黒色粘土層が、弥生時代後期末の遺物包含層（層厚約0.6m）で、V様式系壺の底部などが数点出土している。

TP5.4m以下については遺構・遺物を認めることができなかった。

第4区—盛土以下TP6.6m（地表下2.1m）までが近現代の水田耕作による土層であり、TP6.6m以下TP6.0mまで（地表下2.1m~2.7m）で中世の遺物包含層を確認した。またTP6.0m以下TP5.4mまで（地表下2.7m~3.3m）の河川堆積による粗砂層内からは、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が少量出土している。

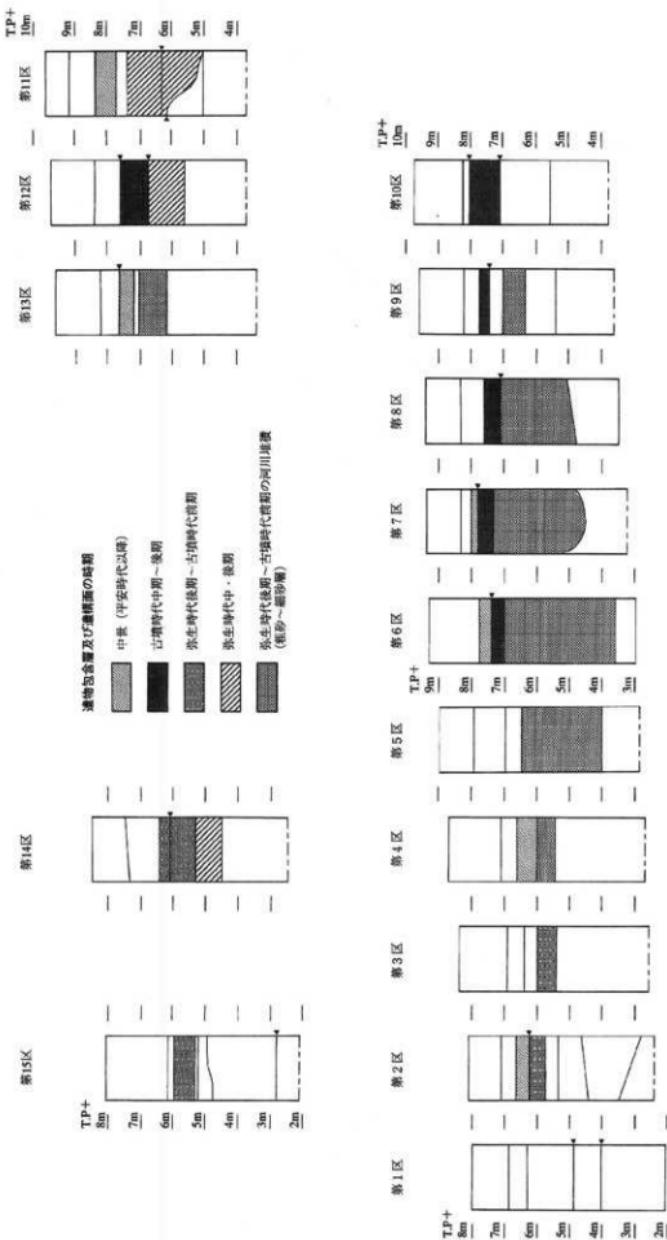
第5区—盛土以下TP7.2m（地表下1.8m）までは近現代～近世の水田耕作による土層が続く。その中で、盛土直下の地表下1.3mより瓦磧枠の井戸（SE501）を1基検出した（井戸深度：地表下1.3m~5.4m・深さ約4.1m）。この井戸は、3段もしくは3段以上積んだ瓦磧枠（一周9枚）の下に桶を2つ重ね、そして一辺約1.2m・高さ約1mの木組の貯水枠を置き、さらに最下部に桶を1つ置く構造であった。近世の水田耕作に伴うもので、歓状の高まりに掘られたものと推測される。その方形の掘り方（約2m四方）からは、近世瓦・土師器・須恵器・庄内式壺・弥生土器などが出土している。この井戸は、井戸内部の埋土の状況から竜華操車場造営の直前まで使用されていたと考えられる。

TP7.2m以下TP6.5m（地表下2.5m）まで遺構・遺物は、認められなかった。そして、TP6.5m以下TP4.0m（地表下5.0m）までが、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む河川堆積であることを確認した。この粗砂層中より多量のV様式系・庄内式・布留式を中心とした土器片やサヌカイトが出土している。この粗砂層の上層から下層の間すべてに布留式以前の土器が混在していることから、ほぼ同時期に堆積したものと考えられる。

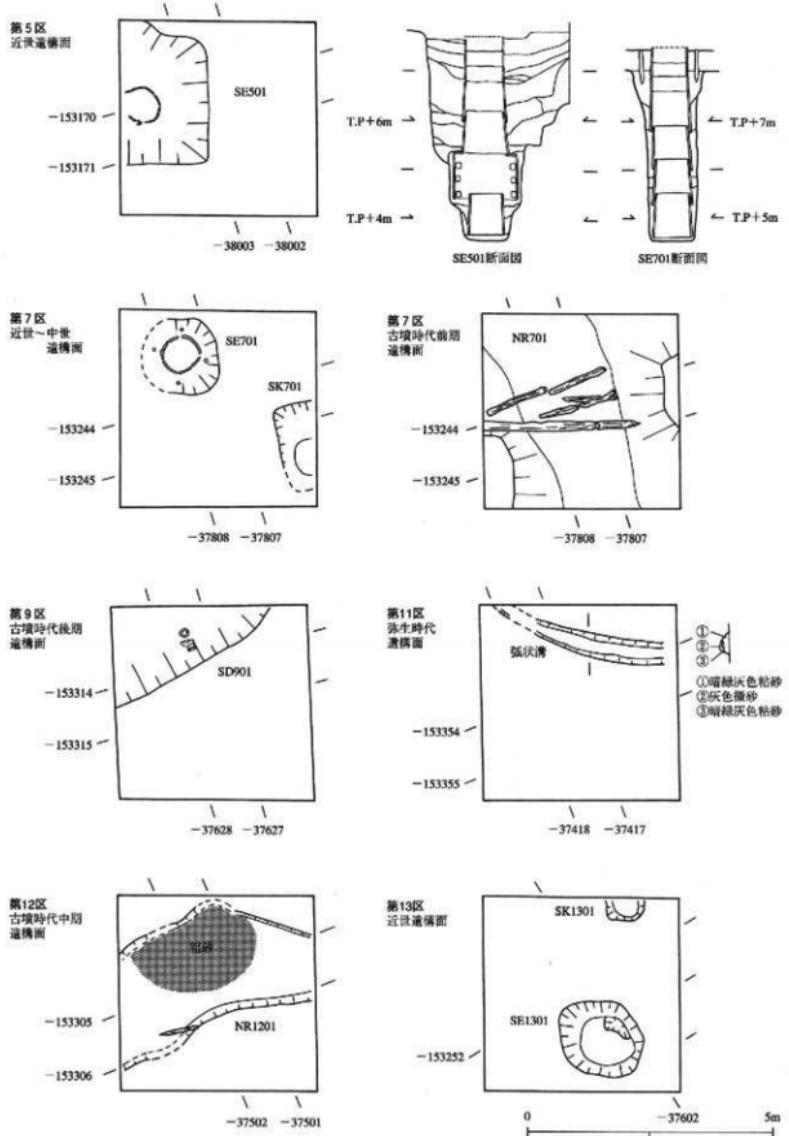
TP4.0m以下については遺構・遺物を認めることができなかった。

第6区—盛土直下TP7.8m以下TP7.4mまで（地表下1.5m~1.9m）で中世の遺物包含層を、TP7.4m以下TP7.0mまで（地表下1.9m~2.3m）で古墳時代中期の遺物包含層を確認している。また、第5区とほぼ同様の弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む河川堆積粗砂層が、TP7.0m以下TP3.6mまで（地表下2.3m~5.7m）で見られる。

第7区—盛土以下TP8.0m（地表下1.6m）までは、近現代～近世の水田耕作による土層である。そして盛土直下の地表下1.0mより、第5区と同様に近世の瓦磧枠の井戸（SE701）を1基検出した。第5区の井戸とよく似た構造であるが、若干小型で、円形の掘り方を持つ。その構造は、上部が瓦磧枠（一周9枚）の3段積みで、下部が桶枠を4段積んだものであった（井戸深度約4m）。



第26図 土層模式図(1/150)



第27図 遺構平面図 (1 / 100)

TP 8.0m以下TP 7.8m（地表下2.1m）が中世～古墳時代後期にかけての遺物包含層及び遺構面となる。この層からは、瓦器椀、土師器、黒色土器、須恵器等が出土している。遺構としては、中世ごろの焼土坑（SK 701）の一部を検出している。そして、TP 7.8mからTP 7.3m（地表下2.6m）までは、整地層となり、土師器片や須恵器片などが若干含まれている。

TP 7.3m以下TP 4.6m（地表下4.8m）までが、弥生時代後期～古墳時代前期の多数の土器片やサヌカイトを含む河川堆積の粗砂層となる。さらに、その河川が、南北方向の流れであることを示す谷地形（NR 701：河床・地表下4.3m）を確認した。また、その谷地形の肩部上面にて、先端に加工痕のある杭状の木柱（全長約3m）及び自然木が出土している。おそらく流れ着いた木柱が流路の肩部に残されたものであろう。これは平成7年度の大坂府文化財調査研究センターの調査（[後藤1996]）で検出された古墳時代の「堰」（しがらみ状遺構）と同様のものが上流域にも存在することを予想させる。

TP 4.6m以下については遺構、遺物を認めることができなかった。

第8区—盛土直下TP 7.6m（地表下1.8m）までが近現代の水田耕作による土層で、TP 7.6m以下TP 7.1mまで（地表下1.8m～2.3m）で古墳時代中期の遺物包含層を確認している。また、TP 7.1m以下TP 4.7mまで（地表下2.3m～4.7m）の弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む河川堆積粗砂層からは、ほぼ完形の布留式土器（壺）のほか、庄内式土器、弥生土器が出土している。

第9区—盛土以下TP 7.4m（地表下2.2m）までは、近現代～中世の水田耕作による土層である。そして、TP 7.4mのオリーブ黒色粘性シルト層上面において、古墳時代後期末の落ち込み状遺構（SD 901）の一部を検出した。須恵器坏身と須恵器小型壺の完形品、羽釜等が出土している。

さらに、TP 7.0m（地表下2.6m）以下TP 6.3m（地表下3.3m）では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む河川堆積を確認している。これは、第4区から第8区の間で確認した河川堆積のうち最も東端に位置していると考えられ、その層厚も約0.7mと薄くなっている。以東の第10区などでは同時期の河川堆積は見られなかった。

TP 6.3m以下については、TP 5.3m（地表下4.3m）において二次堆積による微量の土器碎片やサヌカイト剥片を含む粗砂～細砂層はあるものの顕著な遺構・遺物は確認できなかった。この層厚は、2m以上あると推測されるが、掘削限界を超えて砂層が続くため確認できなかった。時期については、おそらく縄文時代晚期ごろと考えられる。

第10区—盛土以下TP 8.1m（地表下1.7m）までは近現代の水田耕作による土層であり、TP 8.1m以下TP 7.1mまで（地表下1.7m～2.7m）で、古墳時代中期の遺物包含層を確認している。また、TP 7.1m以下では厚さ1.5m程の植物遺体を多く含む粘土層が続くが、遺構、遺物は検出されなかった。

第11区—盛土以下TP 8.3m（地表下1.5m）までは近現代の水田耕作による土層である。TP 8.3m以下TP 7.6m（地表下2.2m）で中世～古墳時代後期の遺物包含層を確認した。須恵器や土師器片などがわずかに出土している。

TP 7.6m以下TP 7.3m（地表下2.5m）まで遺構・遺物は、認められなかった。

TP 7.3m以下TP 6.25m（地表下3.55m）の暗灰色～暗オリーブシルト質粘土層の間より弥生時代中期～後期にかけての遺物包含層を確認した。層厚は、約1m前後であった。出土遺物は、弥生土器・サヌカイト剝片がある。そして、遺構としては、TP 6.25mの暗灰色粘土層の上面において、弧状溝（幅0.4m・深さ0.2m）を検出した。出土遺物としては、少量の弥生土器片がある。さらにTP 6.1m（地表下3.7m）で深さ約1.1mの南北方向の落ち込みの一部を検出した。出土遺物は、少量の弥生土器細片のみである。この両遺構の間にさほどどの時期差はなく、弥生時代中期以降のものと考えられる。

TP 6.1m以下については遺構・遺物を認めることができなかった。

第12区—盛土以下TP 7.6m（地表下2.1m）までは近現代の水田耕作による土層である。TP 7.6m以下TP 6.7mまで（地表下2.1m～3.0m）では、古墳時代中期頃と考えられる自然流路（NR 1201）が検出され、流路の湾曲部西側の粗砂層内からは初期須恵器の把手付碗が出土している。この流路は東から西へ向かって流れていると考えられる。また、TP 6.7m以下TP 5.6mまで（地表下3.0m～4.1m）では弥生時代後期の遺物包含層を確認している。

第13区—盛土以下TP 7.6m（地表下2.0m）までは近現代～近世の水田耕作による土層である。TP 7.8m（地表下1.8m）において、近世の素掘り井戸（SE 1301：直径約1.6m・深さ2.2m）と土坑（SK 1301：出土遺物なし）を検出した。この井戸は、浅いために湧水層には達しておらず、未完成の井戸の可能性が高い。

そして、TP 7.6m以下TP 7.3m（地表下2.3m）までが中世の遺物包含層となるが、遺物はわずかである。TP 7.3m以下TP 7.0m（地表下2.6m）までは遺構・遺物は認められなかった。

TP 7.0m以下TP 6.2m（地表下3.4m）で古墳時代前期～中期ごろの微砂層とシルト層の互層状の河川堆積中より土師器壺の完形品が1点のみ出土している。

TP 6.2m以下については遺構・遺物を認めることができなかった。

第14区—盛土以下TP 6.4m（地表下2.1m）までは近現代の水田耕作による土層であり、TP 6.4m以下TP 5.3mまで（地表下2.1m～3.2m）では、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層を確認している。また、TP 5.3m以下TP 4.5mまで（地表下2.1m～4.0m）では弥生時代後期の遺物包含層を確認している。

第15区—盛土以下TP 6.2m（地表下2.0m）までは竜華操車場時代の擾乱層で、操車場の「転車台」（ターンテーブル）がこの付近にあったと考えられる。

この擾乱層によって良好な土層ではなかったが、TP 6.0m（地表下2.2m）以下TP 5.4m（地表下2.8m）のオリーブ黒色シルト混粘土層が、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての遺物包含層となる。層厚は、約0.7mある。V様式系壺や小型壺などが出土している。

TP 5.3m（地表下2.9m）からTP 4.9m（地表下3.3m）の間で二次堆積による微量の土器碎片を含む粗砂層が存在する。時期については不明である。

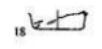
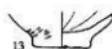
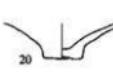
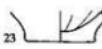
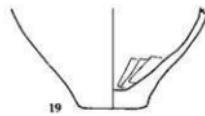
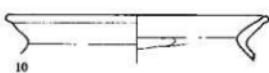
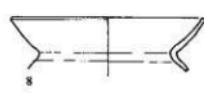
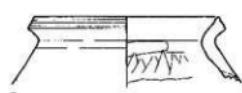
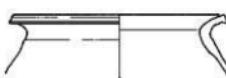
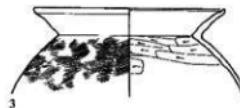
TP 4.9m以下については遺構・遺物を認めることができなかったが、TP 2.85m（地表下5.35m）の暗灰色シルト質粘土層の上面で、約10cm大の動物（鹿？）の足



第2区 出土遺物



第3区 出土遺物



第5区 出土遺物

第26図 久宝寺遺跡(95—565)実測図その1

跡と思われる痕跡を多数検出した。人の足跡は確認できなかった。時期については不明である。おそらく湿地帯等に残された足跡が、洪水砂によって埋もれたものと推測される。

5. 出土遺物 について

(各調査区出土遺物実測図 及び 出土遺物観察表 参照)

第1区—近世の遺構面等に陶器・土師器・須恵器・瓦・瓦器・弥生土器などの破片が出土しているが、図化できるものはなかった。

第2区—1・2はV様式系の壺の口縁部であり、同じ層からは、図化は出来なかったものの壺の破片も出土している。また、上層の中世の遺物包含層からは黒色土器Aが出土している。

第3区—1～8は、図化した弥生時代後期の遺物包含層出土の土器である。1～5は、V様式系の壺の底部である。6は壺の底部である。内面にハケを施す。7は壺の底部で、内面はヘラナデを施す。8は高杯の脚部の一部で、外側はヘラミガキを施す。

第4区—遺物包含層の遺物は土師器・弥生土器などあるが、すべて細片であるので図化できなかった。

第5区—1～48まですべて弥生時代後期～古墳時代前期の河川堆積中の遺物である。この粗砂層中の土器は、ほとんどすべてが破片で、全体にやや摩滅した状態であった。

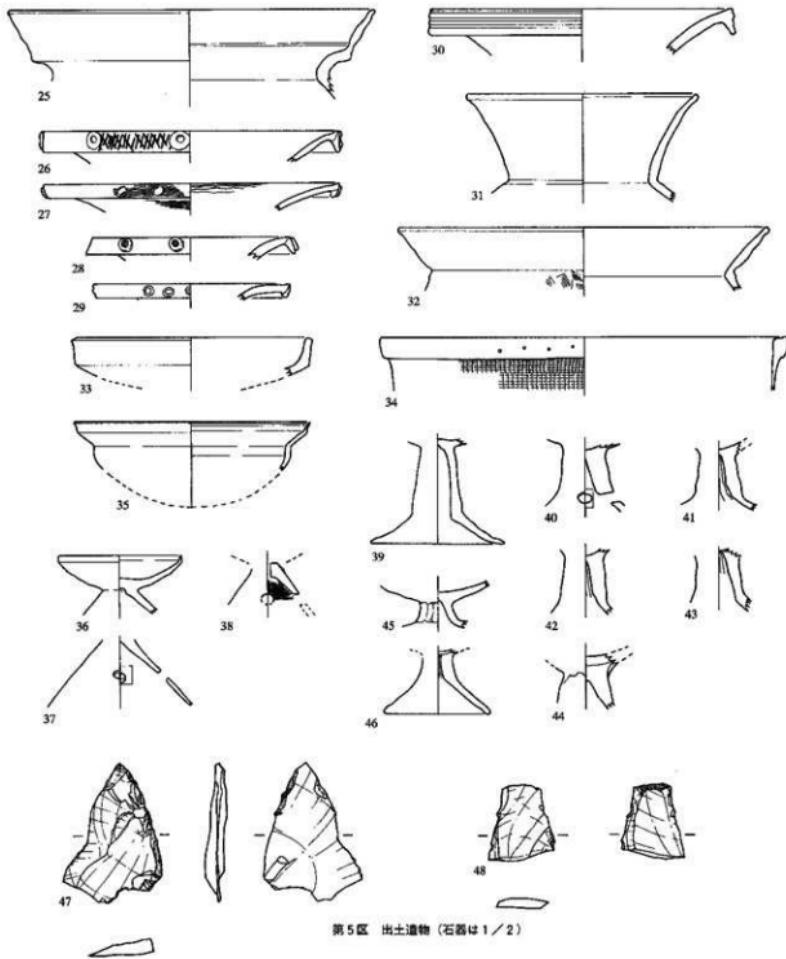
1～10は壺の口縁部の破片である。口縁の形状・調整等から、各時期の壺に分類できる。1はV様式系壺で、2・3は外側を細かいタタキを施す庄内式壺、4・5は肩部付近まで外側ハケ調整を行う庄内式壺である。6・7は弥生時代後期の壺で、6は口縁部が外反し、口縁端面に凹線を施す。7は口縁が短く外反し、凹線を施す。8は口縁部の一部が残存するのみであるが、布留傾向壺であろう。9は直口する壺もしくは短頸壺に分類できる。11～18はV様式系壺の底部、19～24は、それぞれ外側ナデ調整の壺・壺の底部である。

25は二重口縁壺の口縁部、26～29は円形浮文を貼り付けた装飾壺の口縁部、30は凹線を施す装飾壺の口縁部、31は直口壺の口縁部である。32は壺の口縁部もしくは復元径の大きさから大型の鉢の口縁部と考えたい。33は、壺の口縁部の一部である。34は大型の鉢の段状口縁の一部で、わずかに口縁部の刺突文と外側の簾状文が残っていた。35は口縁部が二段に屈曲する鉢である。36～38は小型器台の受部及び脚部である。39～44は、それぞれ高杯の脚部の破片である。45・46は小型高杯の杯部の破片と脚部である。47・48はサカイトの剥片である。

第6区—1は古墳時代中期の土師器高杯である。また弥生時代後期～古墳時代前期の河川堆積による粗砂層からは庄内式土器・弥生土器が出土している。

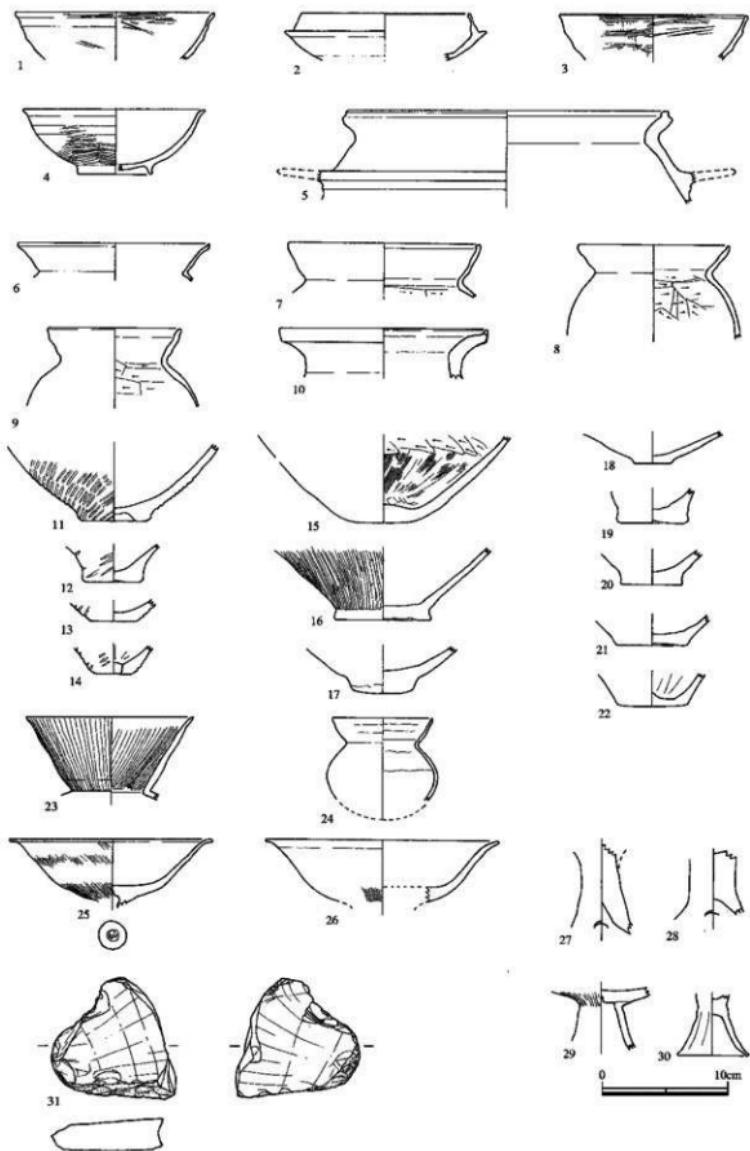
第7区—瓦器楕（1）・須恵器坏身（2）は、それぞれ遺物包含層出土の遺物である。瓦器楕（3）・黒色土器（4）・羽釜（5）はSK701出土の遺物である。4は口縁部が外反し、高台がやや「ハ」の字状に聞く。

6～30が、弥生時代後期～古墳時代前期の河川堆積中の出土遺物である。6～9は壺の口縁部で、6は庄内式壺で、口縁端部をややつまみ上げる。7～9は布留式



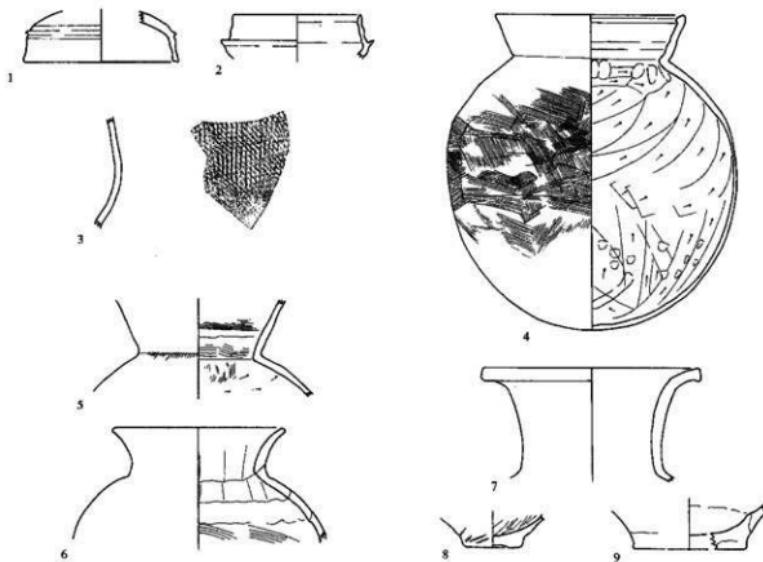
第6区 出土遺物

第29図 久宝寺遺跡（95-565）実測図その2

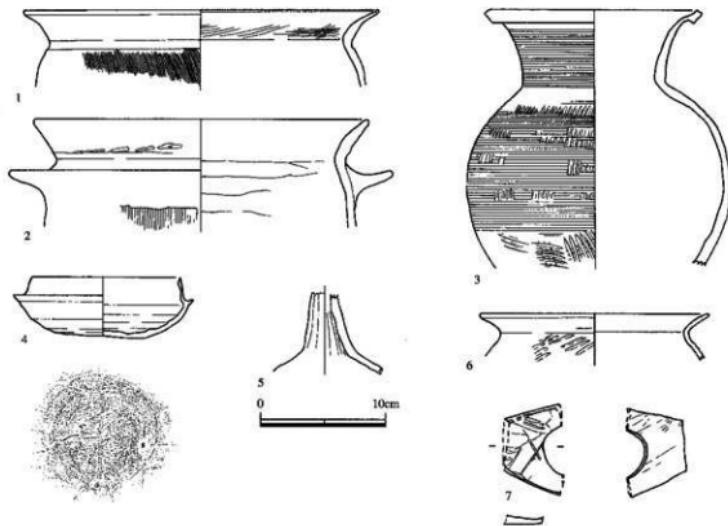


第7区 出土遺物 (石器は 1/2)

第30図 久宝寺遺跡 (95-565) 実測図その3



第8区 出土遺物



第9区 出土遺物

第31図 久宝寺遺跡（95-565）実測図その4

甕である。7は口縁部がやや薄く内湾して立ち上がり、内傾する端面を持つ。10は広口壺の口縁部である。11～13はV様式系甕の底部で、14はV様式系の有孔鉢の底部である。15～22は、壺もしくは甕の底部である。23は直口壺の口縁部で、内外面ともに縦方向のヘラミガキ調整である。24は精製品の小型丸底甕である。25・26は高杯の杯部である。両者とも形状はやや椀形で、口縁端部が外反する。外面はハケ調整を行った後、ナデ消している。27～29は高杯の脚部の破片である。30は、ミニチュアの高杯の脚部である。31はサヌカイト剥片である。

第8区-1は須恵器杯蓋、2は須恵器杯身で、とともに古墳時代中期（T K47前後）のもの、3は須恵器甕の胴部で、格子タタキに2条の線刻が見られ韓式系と考えられる。4は弥生時代後期～古墳時代前期の河川堆積による粗砂層の上層から横倒しの状態で出土した布留式土器甕（Ⅲ期）で、外面の肩部から底部にかけてスグが付着している。5～9は上記の粗砂層の中層から出土した弥生土器の壺および甕で、同じ層からは、庄内式土器の破片も出土している。

第9区-1～7はSD901の出土遺物である。1は土師器甕の口縁部で、外面は縦方向のハケを施す。2は羽釜の上半部で縦方向のハケを施す。おそらく長胴の羽釜になるとを考えられる。3は底部は欠くもののほぼ完形の須恵器の小型甕である。頸部と体部にカキ目を施す。4はT K10型式の完形の須恵器杯身で、底部に「×」のヘラ記号がある。その他に、高杯脚部（5）・混入品であるV様式系甕口縁部（6）・用途不明の板状土器（7）などがある。また、高台付土師皿の底部（8）は、上面の中世遺構面に伴う遺物と考えられる。

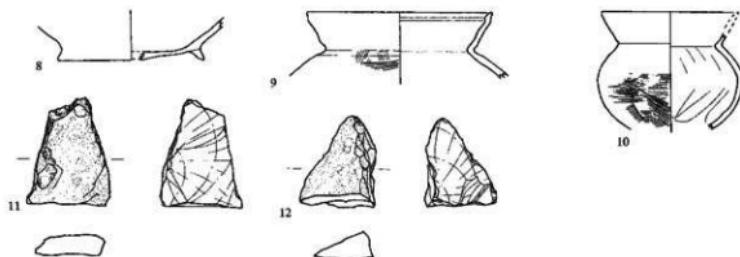
布留式甕（9）・小型丸底甕（10）の破片は、弥生時代後期～古墳時代前期の河川堆積東端の河川堆積中の出土遺物で、それぞれ布留式期のものである。

サヌカイト剥片（11・12）は、地表下4.3mにおいて確認した繩文土器細片とともに粗砂層中より出土している。

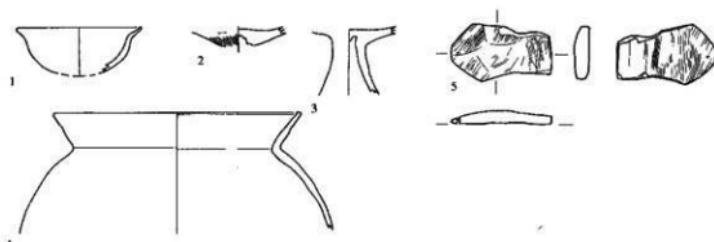
第10区-1は土師器の小型鉢と考えられる破片で、2・3は土師器高杯である。4は布留式土器の甕口縁部で体部の湾曲の様子から長胴になると思われ、また胎土に結晶頁岩の粒子が含まれ、内外面ともに黒変がみられる。1～4はいずれも古墳時代中期頃のものである。5は滑石製で直径2mmの穿孔が1つあり、両面ともに擦痕があるが、本来の形状や用途については不明である。

第11区-須恵器杯蓋（1・2）、杯身（3）は、それぞれ古墳時代後期以降の遺物包含層の出土遺物である。

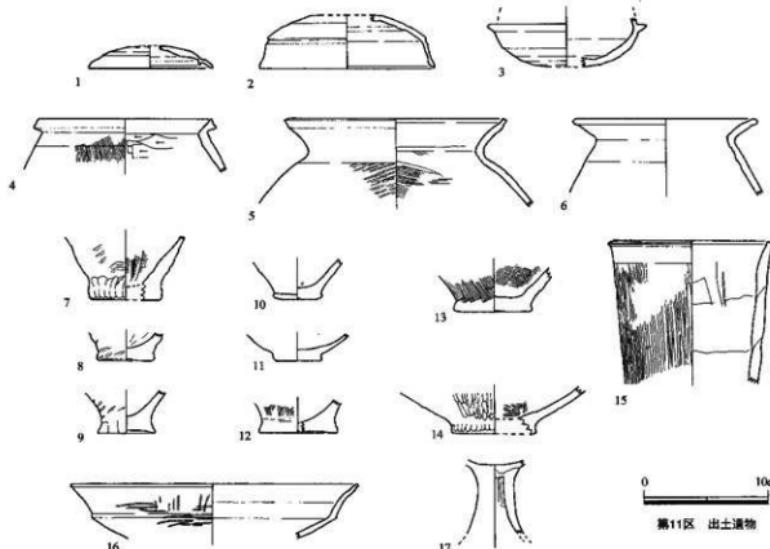
4～25は、弥生時代中期～後期の遺物包含層の出土遺物である。この層で出土した土器は、主に弥生時代後期のものであるが、若干弥生時代中期後半の土器が混じっている。4は弥生土器の甕の口縁部である。短く外反する口縁で、外面はナナメハケで、内面は若干ケズリをほどしているようである。5はV様式系の甕の口縁部で、暗褐色を呈す。6は弥生土器の甕の口縁部である。外面はナデ調整である。7～9はV様式系の底部である。10～14は甕・壺の底部である。15は直口壺のやや長めの頸部で、ほとんど直立した形状である。外面は縦方向の細かいヘラミガキを施す。16は高杯の杯部で、外面はヘラミガキを施す。17は高杯の脚部である。18は細頸甕の頸部～肩部の破片である。頸部～肩部にかけて10条の簾状文を施し、肩部に



第9区 出土遺物 (石器は1/2)

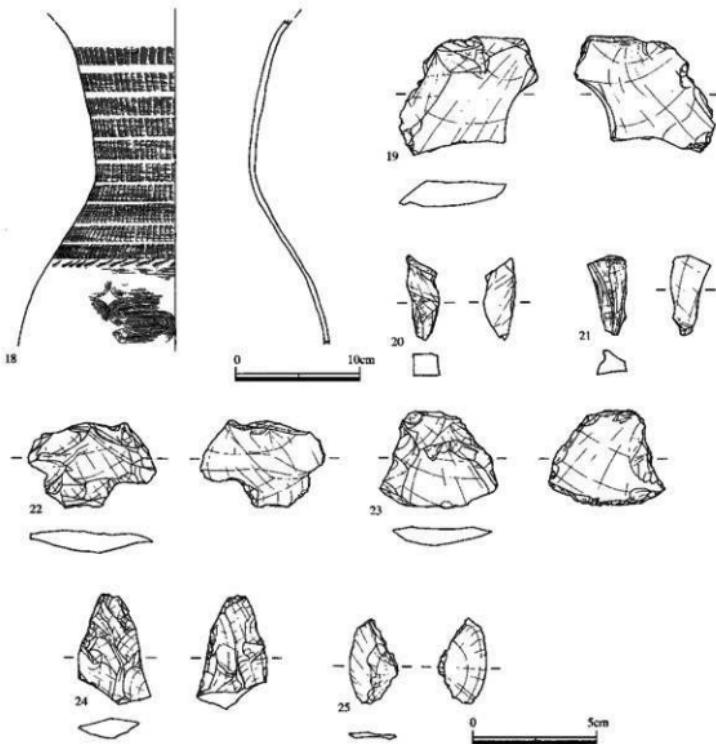


第10区 出土遺物

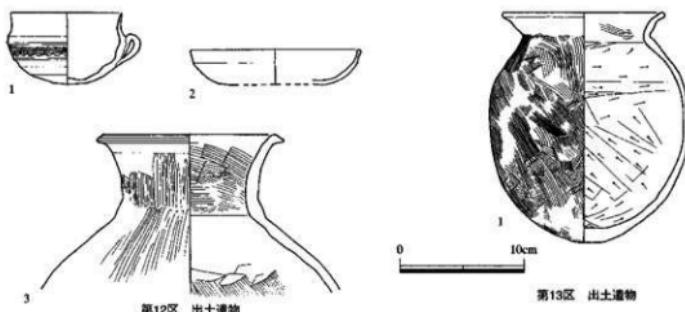


第11区 出土遺物

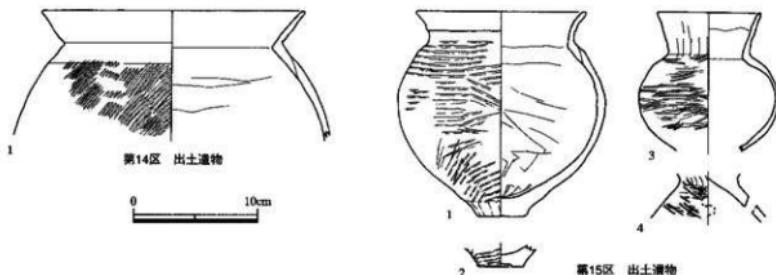
第32図 久宝寺遺跡 (95-565) 実測図その5



第11区 出土遺物（石器は1／2）



第33図 久宝寺遺跡（95-565）実測図その6



第34図 久宝寺遺跡（95-565）実測図その7

かけてはナナメ方向のハケ状の列点文の下に幾条かの流水文を施している。19~25はサヌカイト剥片である。

第12区-1は自然流路（N R 1201）内の粗砂層内から出土した須恵器の把手付碗で、5世紀中頃のものと思われる。また同じ層内からは同様の把手付碗で別固体の破片も出土している。2は土師器の皿である。3は弥生時代中期～後期の包含層から出土した弥生土器の壺で、同じ層からは壺や高杯の破片も出土している。

第13区-1は粗砂とシルトの互層状堆積中から出土した土師器の小型壺で、やや厚手の器壁を持ち、やや長胴ぎみの器形で丸底である。調整は、外面を荒いハケで全面に施し、内面がヘラケズリである。

第14区-1は弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層から出土したV様式系の壺で、同じ層内からは高杯や庄内式土器の破片も出土している。

第15区-1~4は弥生時代後期末の遺物包含層の出土遺物である。1はV様式系壺で、球形の体部で、丸底の底部を持つ。外面はタタキで、内面はヘラナデを施す。2はV様式系の壺の底部である。3は小型の丸底壺であるが、4の脚部片と接合する可能性がある。外面調整は3・4とも細かいヘラミガキを施す。

6. 調査のまとめ

1. 昭和初期（八尾市1983）における竜華操車場建設時の盛土層（摂津地域からの客土）を除去すると、近代から近世にかけての水田耕作面が確認できた。特に、第5区・第7区・第13区で検出した近世の井戸は、中河内周辺で多く分布している農耕に伴う灌漑用のものであると考えられる。井戸の構造は、河内氏の分類による（河内一浩1986・1992）と、それぞれII類・III類・V類にあたる。第5区と第7区の井戸は、ほぼ東西一直線上に約200m離れており、今後の調査によって近世条里に対応した多くの井戸が検出される可能性があろう。

2. 平安時代以降の遺構面は、第5～6区以西ではTP6.0m～6.2m前後があり、遺物包含層の層厚は、0.3m前後である。第5～6区以東は、TP7.3m～7.7m前後にあるが、近世以降に削平されている部分も多い。

3. 古墳時代中期～後期の遺構面は、第5～6区以東で確認できる。竜華操車場跡地の南側ではTP7.0m～7.3m、北側ではTP6.7m前後に存在する。遺物包含層の層厚は、0.5m前後である。

4. 弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構面は、第14区や95-4トレンチ（平成7年度大阪府文化財調査研究センター調査部分：本田1996）以西及び第3～4区以西、第13～12区以東に存在する。ただし、今回の調査区東端の第11区については、弥生時代中期の遺物も含む層を検出している。上記の西側地域における遺物包含層の上面は、TP6.0m前後、東側地域ではTP6.7m～7.3mに存在している。そして、下面は、第11区・第14区以外はTP5.5m前後、第11区はTP6.2m、第14区はTP4.5mに存在する。遺物包含層の層厚は、地区ごとにばらつきはあるものの、およそ0.5m前後である。

5. 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む河川堆積層は、竜華操車場跡地内のほぼ中央部において確認でき、この地区を分断する南北方向の大河川もしくは幾本かの小河川が、存在していたと推測される。竜華操車場跡地内の南側の調査区では、第4区～第9区の間に存在し、北側の調査区では、95-8トレンチ（センター調査地区）～第13区の間に存在している。河川堆積の上面は、TP7.3m～6.0m付近に存在する。そして、第6区のTP3.6m付近から95-8,9（センター調査地区）付近に河床の中心があるものと想定される。竜華操車場跡地の中央部北側の95-8,9で検出された「堰」（本田1996）は、その河川の流れを制御しようとしたもので、全体像の解明が期待される。

この河川堆積層中で最も土器片が多く出土した第5区・第7区では、V様式系から庄内式、布留式の土器が混在しているが、布留式土器の破片が最も多く出土している。そして、今回の調査区の中での該期の河川堆積層には、須恵器は含まれていない。このことからもおそらく古墳時代中期（布留式新相）ごろまでの河川堆積層であったと考えられる。

今回の試掘調査の範囲は、ほんのわずかの範囲ではあるが、広大な竜華地区内の遺跡の性格やその全体像を理解することができた。竜華地区を大きく東西に分けた場合、JR久宝寺駅の西側地区は、弥生時代後期～古墳時代前期の時期を主体とした地域であると考えられる。そして、東側地区は、弥生時代中期や弥生時代後期末～古墳時代前期の集落域であることはもちろん、古墳時代後期の集落等の存在が、予測される地域である。また、渋川廃寺や跡部遺跡・久宝寺遺跡などの周辺遺跡との関連も注目される。

（第1・3・5・7・9・11・13・15区・まとめ 藤井）

（第2・4・6・8・10・12区 吉田珠己）

今回の調査にあたっては、現地にて下記の諸氏の指導・助言を賜った。末筆ながら、記して感謝の意を表したい。

山本彰・橋本高明（大阪府教育委員会）

後藤信義・島崎久恵・本間元樹・本田奈都子（（財）大阪府文化財調査研究センター）

[参考文献]

河内一浩1986「近世農耕井戸試論」「稻葉遺跡発掘調査概要・I」大阪府教育委員会

1992「統・近世農耕井戸試考」「関西近世考古学研究III」

後藤信義1996「久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書」

（財）大阪府文化財調査研究センター

1996「久宝寺」「発掘速報展 大阪'96」（財）大阪府文化財調査研究センター

本田奈都子1996「古墳時代の合掌型壙—久宝寺遺跡・竜華地区検出例をもとに—」

「大阪文化財研究」第10号 （財）大阪府文化財調査研究センター

本間元樹1996「久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査報告書」（財）大阪府文化財調査研究センター

八尾市史編集委員会 1983「八尾市史（近代）本文編」

久宝寺遺跡（95-565）出土遺物観察表 その1

団版番号	出土地点	器種	法量	調整・形態等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第2区-1	包含層	弥生土器 壺	口径13.2cm	外面)タタキ・内面)ナデ	灰黄色	密	良好	
	-2	包含層	弥生土器 壺	口径12.1cm 外面)タタキ・内面)ハケ	にぶい赤褐色	密	良好	
第3区-1	包含層	V様式系壺 底部	底径4cm	外面)タタキ・内面)ナデ	灰黄色	密	良好	
	-2	包含層	V様式系壺 底部	底径4cm 外面)タタキ・内面)	灰白色	密	良好	底部1/4のみ残存
-3	包含層	V様式系壺 底部	底径4.4cm	外面)タタキ・内面)ナデ	灰黄褐色	密	良好	
	-4	包含層	V様式系壺 底部	底径4.2cm 外面)タタキ・内面)ナデ	にぶい黄橙色	密	良好	底部稍圧痕2
-5	包含層	V様式系壺 底部	底径3.6cm	外面)タタキ・内面)ハケ	にぶい黄橙色	密	やや歎	底部スス付着
	-6	包含層	壺底部	底径3.8cm 外面)ナデ・内面)ハケ	褐灰色	密	良好	
-7	包含層	壺底部	底径5cm	外面)ナデ?・内面)ヒラミガキ	灰黄褐色	やや粗	やや歎	
	-8	包含層	弥生土器 高环脚部	外面)ヘラミガキ・内面)ハケ	にぶい黄橙色	密	良好	
第5区-1	河川堆積層	V様式系壺 口縁部	口径17cm	外面)タタキ・内面)ナデ	にぶい黄橙色	密	良好	
	-2	河川堆積層	庄内式壺 口縁部	口径18.4cm 外面)タタキ(5本/cm)・内面)ヘラケズリ	にぶい黄褐色	密	良好	口縁部1/7残存
-3	河川堆積層	庄内式壺 口縁部	口径15.6cm	外面)細かいタタキ(約6本/cm)・内面)ヘラケズリ	暗灰黃色	密	良好	
	-4	河川堆積層	庄内式壺 口縁部	口径15cm 外面)ハケ・内面)ヘラケズリ・口縁部ヨコハケ	灰褐色	密	良好	
-5	河川堆積層	庄内式壺 口縁部	口径17.2cm	外面)ハケ・内面)ヘラケズリ	褐灰色	密	良好	
	-6	河川堆積層	弥生土器 壺 口縁部	口径18cm 外面)調整不明・内面)ヨコナデ?	にぶい黄褐色	密	良好	
-7	河川堆積層	弥生土器 壺 口縁部	口径16cm	外面)ナデ?・内面)ヘラオサエ	にぶい黄橙色	密	良好	
	-8	河川堆積層	布留傾向壺 口縁部	復元口径16cm 外面)調整不明・内面)ヘラケズリ	黄褐色	密	良好	口縁部わずかに残存
-9	河川堆積層	土師器壺 口縁部	口径14.6cm	外面)ハケ・内面)口縁部ハケ・わずかにケズリが残る	黄褐色	密	良好	短頭壺の可能性あり
	-10	河川堆積層	土師器壺 口縁部	口径23.4cm 外面)調整不明・内面)ナデ?	にぶい黄褐色	密	良好	
-11	河川堆積層	V様式系壺 口縁部	底径5cm	外面)タタキ・内面)ナデ	にぶい黄色	密	良好	底部一部黒変
	-12	河川堆積層	V様式系壺 口縁部	底径4cm 外面)タタキ・内面)ナデ	にぶい橙色	密	良好	底部内面に稍圧痕あり

久宝寺遺跡（95-565）出土遺物観察表 その2

閑版番号	出土地点	器種	法量	調整・形態等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第5区-13	河川堆積層	V様式系壺 底部	底径4.8cm	外面) タタキ・内面) ハラナデ	明赤褐色	密	良好	
-14	河川堆積層	V様式系壺 底部	底径4cm	外面) タタキ・内面) 調整不明	灰褐色	密	良好	
-15	河川堆積層	V様式系壺 底部	底径3.4cm	外面) タタキ・内面) ナデか?	にぶい黄褐色	密	良好	底部1/3のみ残存
-16	河川堆積層	V様式系壺 底部	底径4.4cm	外面) タタキ・内面) 調整不明	にぶい褐色	密	良好	
-17	河川堆積層	V様式系壺 底部	底径4.8cm	外面) タタキ・内面) ハケ	にぶい褐色	密	良好	
-18	河川堆積層	V様式系壺 底部	底径4.2cm	外面) タタキ・内面) 底部のみ指オサエ	赤褐色	密	良好	一部黒変
-19	河川堆積層	弥生土器 壺	底径5.6cm	外面) ナデ?・内面) ナデ(やや強め)	黄褐色	密	やや歎	
-20	河川堆積層	弥生土器 壺	底径3.2cm	外面) ナデ?・内面) ナデ	黄灰色	密	良好	
-21	河川堆積層	弥生土器 壺	底径4cm	外面) ナデ?・内面) ナデ	灰色	密	良好	
-22	河川堆積層	弥生土器 壺	底径3.6cm	外面) ナデ・内面) ハラナデ	橙色	密	良好	底部に二次焼成の痕跡
-23	河川堆積層	弥生土器 壺	底径6cm	外面) ナデ・内面) わずかにケズりあり	褐灰色	密	良好	底部にのみスス付着
-24	河川堆積層	弥生土器 壺	底径4.4cm	外面) ナデ・内面) 底部の中心に向かってハケ調整	にぶい黄橙色	密	良好	
-25	河川堆積層	二重口縁壺 口縁部	口径30cm	外面) ヨコナデ・内面) 口縁付近ヨコナデ	にぶい橙色	密	良好	
-26	河川堆積層	装飾壺 口縁部	口径28cm	円形浮文・ヘラ描き文	にぶい橙色	密	良好	
-27	河川堆積層	装飾壺 口縁部	口径28cm	円形浮文・ヘラ描き波状文	橙色	密	良好	
-28	河川堆積層	装飾壺 口縁部	口径16cm	円形浮文	灰黄褐色	密	良好	
-29	河川堆積層	装飾壺 口縁部	口径16cm	円形浮文	にぶい赤褐色	密	良好	
-30	河川堆積層	装飾壺 口縁部	口径25cm	3本の凹線	にぶい橙色	密	良好	
-31	河川堆積層	直口壺 口縁部	口径19cm	内外面ともに摩滅しているため調整不明	にぶい橙色	密	良好	
-32	河川堆積層	大型鉢 口縁部	口径30cm	外面) ハケ・内面) ケズリ	黄灰色	密	良好	口径1/8残存
-33	河川堆積層	壺 口縁部	口径19.2cm	内外面ともに摩滅しているため調整不明	にぶい黄褐色	密	良好	長石・角閃石多数含む
-34	河川堆積層	弥生土器 鉢	口径33cm	外面) わずかに縞状文が残る 内面) 調整不明	にぶい黄橙色	密	良好	

久宝寺遺跡(95-565)出土遺物観察表 その3

図版番号	出土地点	器種	法量	調整・形態等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第5区-35	河川堆積層	土師器鉢 口縁部	口径19.1cm	摩滅しているものの内外面ともにいねいなナナ調整か	にぶい黄 橙色	密	良好	
-36	河川堆積層	小型器台 受部	口径10.1cm	内外面とも摩滅しているため 調整不明	にぶい橙 色	密	良好	
-37	河川堆積層	小型器台 脚部		内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい橙 色	密	良好	
-38	河川堆積層	小型器台 脚部		外面) 調整不明・内面) ハケ	にぶい黄 橙色	密	良好	
-39	河川堆積層	高杯 脚部	底径11cm	内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい橙 色	密	良好	
-40	河川堆積層	高杯 脚部		内外面ともに摩滅しているた め調整不明	灰黄色	密	良好	
-41	河川堆積層	高杯 脚部		内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい黄 橙色	密	良好	
-42	河川堆積層	高杯 脚部		内外面ともに摩滅しているた め調整不明	橙色	密	良好	
-43	河川堆積層	高杯 脚部		内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい黄 橙色	密	良好	
-44	河川堆積層	高杯 脚部		内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい橙 色	密	良好	
-45	河川堆積層	小型高杯 杯部		内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい黄 橙色	密	良好	
-46	河川堆積層	小型高杯 脚部	底径9.2cm	内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい黄 橙色	密	良好	
-47	河川堆積層	サヌカイト 剥片	長辺3cm 幅4cm				良好	
-48	河川堆積層	サヌカイト 剥片	底径8.5cm 脚高5.7cm				良好	
第6区-1	包含層	土師器高杯	底径8.5cm 脚高5.7cm	摩滅のため不明	橙色	密	良好	
第7区-1	包含層	瓦器碗	口径16cm	外面) 口縁部付近ヘラミガキ	黒色	密	良好	
-2	包含層	須恵器杯身	口径14cm	外面) ロクロナデ・内面) ロ クロナデ	灰白色	密	良好	
-3	SK701	瓦器碗	口径15.6cm	外面) ヘラミガキ・内面) ヘ ラミガキ	黒灰色	密	良好	
-4	SK701	黒色土器	口径14.8cm	外面) ヘラミガキ・内面) 摩 滅のため不明	黒灰色	密	良好	
-5	SK701	羽釜	復元口径 27cm	内外面ともに磨滅しているた め調整不明	灰黄色	密	良好	
-6	河川堆積層	庄内式壺 口縁部	口径15.6cm	外面) タタキ・内面) ヘラミ ガキ(若干残る程度)	にぶい橙 色	密	良好	
-7	河川堆積層	布留式壺 口縁部	口径15.8cm	外面) ハケか・内面) ヘラケ ズリ	にぶい橙 色	密	良好	

久宝寺遺跡（95-565）出土遺物観察表 その4

団版番号	出土地点	器種	法量	調整・形態等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第7区-8	包含層	布留式壺 口縁部	口径13.2cm	外面) ヨコナデ・内面) ヘラ ケズリ	暗褐色	密	良好	
-9	包含層	布留式壺 口縁部	口径12.1cm	外面) ヨコナデ・内面) ヘラ ケズリ	淡灰褐色	密	良好	
-10	包含層	壺 口縁部	底径4cm	外面) ヨコナデ・内面) 強い ヨコナデ	にぶい黄 橙色	密	良好	角閃石含む
-11	包含層	V様式系壺 底部	底径4cm	外面) タタキ・内面) ナデ	赤橙色	密	良好	
-12	包含層	V様式系 底部	底径4.4cm	外面) タタキ・内面) ナデ	淡黄褐色	密	良好	
-13	包含層	V様式系壺 底部	底径4.2cm	外面) タタキ・内面) ナデ	赤灰色	密	良好	石英多し
-14	包含層	V様式系有孔 鉢	底径3.6cm	外面) タタキ・内面) ナデ	にぶい赤 褐色	密	やや軟	
-15	包含層	弥生土器 壺 底部	底径3.8cm	外面) ナデ・内面) 底部付近 ハケナデ・体部ケズリ	暗灰黄色	密	良好	角閃石を全体に含む・一部黒変あり
-16	包含層	弥生土器 壺 底部	底径5cm	外面) 縦方向のヘラミガキ・ 内面) ナデ	にぶい黄 橙色	やや粗	やや軟	底部に軽圧痕あり
-17	包含層	弥生土器 壺 底部		内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい黄 橙色	密	良好	
-18	河川堆積 層	弥生土器 壺 底部	口径17cm	内外面ともに摩滅しているた め調整不明	橙色	密	良好	
-19	河川堆積 層	弥生土器 壺 底部	口径18.4cm	外面) 調整不明・内面) ナデ	赤褐色	密	良好	底部に軽圧痕あり
-20	河川堆積 層	弥生土器 壺 底部	口径15.6cm	外面) ナデ・内面) ナデ	橙色	密	良好	一部黒変あり
-21	河川堆積 層	弥生土器 壺 底部	口径15cm	内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい黄 褐色	密	良好	
-22	河川堆積 層	弥生土器 壺 底部	口径17.2cm	外面) ナデ・内面) ナデ	にぶい赤 褐色	密	良好	
-23	河川堆積 層	直口壺 口縁部	口径18cm	外・内面) 縦方向のヘラミガ キ	にぶい黄 褐色	密	良好	
-24	河川堆積 層	小型丸底壺	口径16cm	外・内面) ナデ	黄灰色	密	良好	
-25	河川堆積 層	高杯 杯部	復元口径16 cm	外面) ハケ調整の後ヨコナデ 内面) ヨコナデ	にぶい橙 色	密	良好	
-26	河川堆積 層	高杯 杯部	口径14.6cm	外面) ハケ調整の後ヨコナデ 内面) ヨコナデ	橙色	密	やや軟	
-27	河川堆積 層	高杯 杯部	口径23.4cm	内外面ともに摩滅しているた め調整不明	にぶい黄 橙色	密	良好	円孔3つか
-28	河川堆積 層	高杯 杯部	底径5cm	外面) 調整不明・内面) ヘラ ナデ	暗灰黄色	密	良好	円孔3つか
-29	河川堆積 層	高杯 杯部	底径4cm	外面) 杯部と脚部の接合痕に ハケ・内面) ナデ	橙色	密	良好	

久宝寺遺跡（95-565）出土遺物観察表 その5

圆版番号	出土地点	器種	法量	調整・形態等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
第7区-30	河川堆積層	ミニチュア高杯脚部	底径5.9cm 外面) 横方向のナデ・内面) ナデ	オリーブ 黒色	密	良好	角閃石多数含む	
-31	河川堆積層	サヌカイト剥片	長辺約5cm 幅約1cm					
第8区-1	包含層直上	須恵器杯蓋	口径12.6cm	外面) ヘラケズリ・ナデ 内面) ナデ	黄灰色	密	やや軟	
-2	包含層直上	須恵器杯身	口径10.4cm	外面) ヘラケズリ・ナデ 内面) ナデ	灰色	密	堅歛	
-3	包含層	須恵器 壺	器厚0.7cm	外面) 格子タタキ 織刻2条 内面) ナデ	灰色	密	堅歛	韓式系
-4	河川堆積層	布留式土器壺	口径15.4cm 器高25.9cm	外面) ハケ・内面) ヘラケズリ・口縁部内外面) ナデ	橙色	密	良好	底部内面) 指オサエ・スミ付着
-5	河川堆積層	弥生土器 壺	口径10.0cm	外面) ハケ・内面) ハケ後ヘラケズリ	灰黄色	密	良好	
-6	河川堆積層	弥生土器 壺	口径14.0cm	内面) -部ハケ	淡黄橙色	やや粗	良好	
-7	河川堆積層	弥生土器 壺	口径17.1cm	摩滅のため不明	にぶい黄 橙色	密	やや軟	
-8	河川堆積層	弥生土器 壺	底径4.3cm	外面) タタキ 内面) ハケ	にぶい黄 橙色	密	良好	
-9	河川堆積層	弥生土器 壺	底径9.0cm	内面) 底部指オサエ	にぶい黄 橙色	やや粗	良好	
第9区-1	SD901	土師器 壺 口縁部	口径29.2cm	外面) ハケ(約10本/cm) 内面) 口縁部ハケ・体部ナデ	淡橙色	密	良好	長胴壺か
-2	SD901	土師器 羽釜 上半部	口径27.6cm	外面) 体部ハケ 内面) ナデ	にぶい黄 褐色	密	良好	
-3	SD901	須恵器 小型壺	口径17.4cm 器高21cm	外面) 脊部カキ目・体部タタキの後カキ目・内面) ナデ	灰白色	密	良好	一部に朱彩あり
-4	SD901	須恵器杯身	口径12.1cm 器高4.9cm	外面) 全面ロコナデ 内面) ナデ	灰色	密	良好	底部に自然難・ヘラ記号あり
-5	SD901	土師器 高杯 脚部	底径8.8cm	外面) ナデ・内面) ナデ・指オサエ	橙色	密	良好	
-6	SD901	V様式系壺 口縁部	口径18.6cm	外面) タタキ・内面) ナデ	灰白色	密	良好	
-7	SD901	板状土製品	最大長7cm 幅5mm	全面ナデ調整	橙色	精製	良好	用途は不明
-8	包含層	高台付碗	底径12cm	外面) ナデ・内面) スス付着	にぶい黄 橙色	密	良好	貼り付け高台
-9	河川堆積層	布留式壺 口縁部	口径14.6cm	外面) ハケ・内面) 調整不明	黄灰色	密	良好	1/8残存
-10	河川堆積層	小型丸底壺	体部最大径 11.8cm	外面) ハケ(10本/cm)・ 内面) ヘラナデ	灰黄褐色	密	良好	
-11	下層粗砂層	サヌカイト剥片	長辺4.4cm 幅約0.8cm					

久宝寺遺跡（95-565）出土遺物観察表 その6

団版番号	出土地点	器 様	法 量	調整・形態等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
-12	下層粗砂層	サヌカイト 剥片	長辺3.5cm 幅約1cm					
第10区-1	包含層	土師器小型鉢	口径10.4cm	摩滅のため不明	橙色	密	良好	
-2	包含層	土師器高杯		外面) ハケ後一部ナデ	明赤褐色	密	良好	
-3	包含層	土師器高杯	口径2.6cm	摩滅のため不明	橙色	密	良好	
-4	包含層	布留式土器壺	口径20.2cm	内外面とも黒変	明黄褐色	密	良好	長胴壺？
-5	包含層	不明石製品	4.1×2.4cm 厚さ0.6cm	両面ともに擦痕あり 径2mmの穿孔	緑灰色	滑石製	——	
第11区-1	包含層	須恵器杯蓋	口径10.2cm 器高約2cm	外面) ロクロナデ・ケズリ 内面) ロクロナデ	灰色	密	良好	Ⅲ型式
-2	包含層	須恵器杯蓋	口径14.2cm 器高5.5cm	外面) ロクロナデ・ケズリ 内面) ロクロナデ	青灰色	密	良好	I型式
-3	包含層	須恵器杯身	復元口径11cm	外面) ロクロナデ・ケズリ 内面) ロクロナデ	灰白色	やや粗	良好	
-4	包含層	弥生土器 壺 口縁部	口径15cm	外面) ハケ・内面) ナデ・ケズリ	灰黄色	密	良好	
-5	包含層	V様式系 壺 口縁部	口径18cm	外面) タタキ・口縁部ヨコナデ・内面) ハケナデ	暗褐色	密	良好	1/3残存
-6	包含層	弥生土器 壺 口縁部	口径15cm	外面) ヨコナデ・内面) 口縁部付近強いヨコナデ	にぶい橙色	密	良好	
-7	包含層	V様式系 壺 底部	底径6cm	外面) タタキ・内面) ハケ	にぶい黄 橙色	密	良好	1/3残存
-8	包含層	V様式系 壺 底部	底径4.6cm	外面) タタキ・内面) ナデ	灰赤色	密	やや軟	
-9	包含層	V様式系 壺 底部	底径4.8cm	外面) タタキ・底部下部指才 サエ・内面) ナデ	灰黄色	密	良好	1/4残存
-10	包含層	弥生土器 壺 底部	底径4.2cm	外面) ナデ・内面) ナデ	淡黄橙色	密	良好	
-11	包含層	弥生土器 壺 底部	底径3.8cm	外面) ナデ・内面) ナデ	橙色	密	やや軟	
-12	包含層	弥生土器 壺 底部	底径6.4cm	外面) ハケ・内面) ナデ	赤灰色	密	やや軟	
-13	包含層	弥生土器 壺 底部	底径6.4cm	外面) ハケ・内面) ナデ	にぶい黄 橙色	密	良好	
-14	包含層	弥生土器 壺 底部	底径7.2cm	外面) 縦方向のヘラミガキ 内面) ハケ	にぶい橙 色	密	良好	
-15	包含層	直口壺 口縁部	口径13.6cm	外面) 縦方向のヘラミガキ 内面) ナデ	にぶい黄 橙色	密	良好	蓋母・角閃石を含む
-16	包含層	高杯 杯部	口径23.6cm	外面) ヒラミガキ・内面) ナ デ	褐灰色	密	良好	1/8残存

久宝寺遺跡（95-565）出土遺物観察表 その7

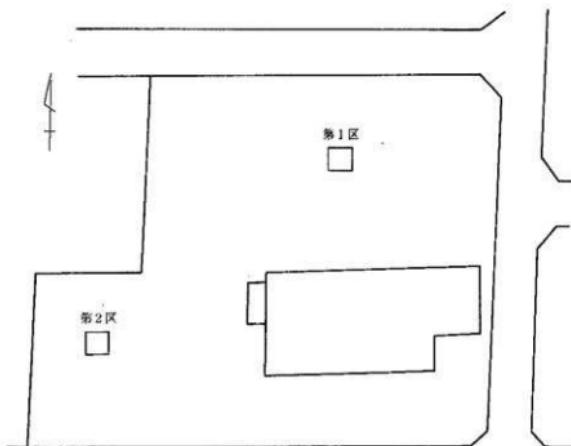
図版番号	出土地点	器種	法量	調整・形態等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
-17	包含層	高杯 脚部		外面) ナデ・内面) ナデ	にぶい黄 褐色	密	良好	
-18	包含層	簾状文 壺 頸部	最大径 26cm	外面) 頸部簾状文・肩部流水文・内面) ナデ	暗褐色	密	良好	
-19	包含層	サヌカイト 剥片	長辺6.5cm 幅1cm					
-20	包含層	サヌカイト 剥片	長辺3cm 幅1cm					
-21	包含層	サヌカイト 剥片	長辺3cm 幅1cm					
-22	包含層	サヌカイト 剥片	長辺5cm 幅0.8cm					
-23	包含層	サヌカイト 剥片	長辺5cm 幅0.6cm					
-24	包含層	サヌカイト 剥片	長辺4.6cm 幅0.8cm					
-25	包含層	サヌカイト 剥片	長辺3.4cm 幅2mm					
第12区-1	NR1201	須恵器 把手付碗	口径9.0cm 器高6.1cm	外面) 波状文・底部へラケズリ	灰色	密	良好	
-2	NR1201	土師器 盆	復元口径 13.9cm	摩滅のため不明	橙色	密	良好	
-3	包含層	弥生土器 壺	口径14.0cm	外面) ハケ後へラミガキ 内面) ハケ	灰オリー ブ色	密	良好	
第13区-1	互層状歯 砂層	土師器 壺	口径13.3cm 器高19cm	外面) 全面に荒いハケ 内面) ヘラケズリ後弱いハケ	にぶい橙 色	やや粗	良好	黒変部分多し
第14区-1	包含層	弥生土器 壺	口径21.6cm	外面) タタキ・内面) ナデ	灰黄色	密	良好	
第15区-1	包含層	V様式系壺	口径14cm 器高16.8cm	外面) タタキ・内面) ハケナ デ (ハケ幅2.6cm)	暗灰褐色	密	良好	黒変部分多し・底 部は指オサ工成形
-2	包含層	V様式系壺 底部	底径3.6cm	外面) タタキ・内面) ナデ	赤褐色	密	良好	全体に黒変を受け ている
-3	包含層	台付壺	口径9.2cm 器高約11cm	外面) 細かいへラミガキ・内 面) ナデ	にぶい灰 白色	密	良好	体部は黒変を受け ている
-4	包含層	台付壺 脚部	残存高 3.5cm	外面) 細かいへラミガキ・内 面) ナデ	にぶい灰 白色	密	良好	3の脚部になる可 能性がある

8. 小阪合遺跡（96-369）の調査

1. 調査地 青山町4丁目1-4
2. 調査期間 平成8年9月5日・6日
3. 調査方法 養護老人ホーム（仮称）建設に先立ち、予定地内における遺構の有無と遺物包含層の層厚を調べるために、旧保健センターの敷地内に2カ所の調査区（第1区・第2区とする）を設定した。そして、地表下約1mまでは機械で掘削し、地表下約3mまで人力と機械を併用して掘削し、遺構確認調査を行った。
4. 調査概要 第1区— 旧保健センター建物の北側の調査区で、約3.0m×約1.5mの範囲を地表下約2.6mまで掘削を行った。盛土以下地表下1.1mまでは近代の水田耕作による土層が続く。そして、地表下1.1mの茶灰色砂混粘土層上面において、近世の溝（SD01）を検出した。出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器などの細片であった。
- 地表下1.3mの暗褐色粘性シルト層の上面において、土坑を1基検出した（Pit 1・覆土：暗灰色シルト質炭泥粘砂）。出土遺物は、羽釜・黒色土器・土師器・須恵器の破片がある。平安時代後期頃の時期と考えられる。
- 地表下1.4m以下、暗灰褐色シルト混粘質土層が須恵器・土師器等を含む奈良時代の遺物包含層となる。そして、地表下1.6mにおいて、炭混じりの黒褐色シルト混粘砂層より須恵器杯身・土師皿・甕・碗などが多数出土している。遺物包含層もしくは落ち込み状の遺構内の覆土と考えられるが、遺構の性格は不明である（SX01）。この土層を取り除いた地表下1.9mより、礎石らしい石を南壁断面付近において検出している。この石が、今回の調査範囲内では、掘っ立て柱建物のものかは、判断できなかった。時期については、出土遺物から奈良時代と考えられる。



第35図 調査地周辺図 (1/5000)



第36図 調査区設定図 (1/800)

そして、地表下2.1mの暗黄褐色粘砂層上面において、土坑の一部を検出した(S K01)。埋土は、暗青灰色小レキ混粘性シルト層の単一層であった。出土遺物は、須恵器杯蓋・甕・土師皿・平瓦片・縄文土器細片などがある。この土坑は、上面の礎石のはば直下にあり関連があると考えられるが、一部であったために確認できなかった。時期については、上面の遺構面とさほど変わらないと考えられる。

以下地表下約2.6mまで遺構・遺物ともに確認できなかった。

第2区— 旧保健センター建物の西側の調査区で、上面で約2m×約2mの範囲を地表下約2.9mまで、掘削を行った。盛土以下地表下1.0mまでは、近世～中世の水田耕作による土層が続く。

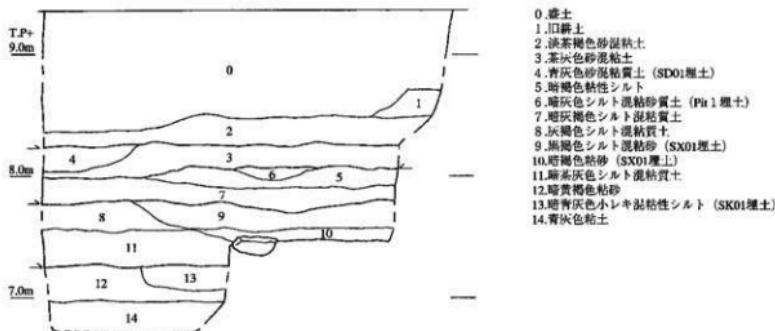
地表下1.0m～地表下1.2mまでが、中世～古墳時代中期の遺物包含層及び遺構面(淡茶褐色砂混粘土層のベース面)で、溝を一条検出している(S D02・覆土：暗褐色粘砂)。出土遺物は、須恵器碗や須恵器甕片・土師器片がある。古墳時代中期以降の時期と考えられる。

そして、地表下1.4m以下地表下2.9mまで(層厚0.7m)が、古墳時代前期(庄内式新相～布留式古相)の遺物包含層及び遺構面である。遺構の性格は不明であるが、おそらく落ち込み状の遺構(S O01)内の堆積土層を掘削したようである。特に上層の地表下1.4m～地表下1.6mの暗褐色砂混粘土層を中心に庄内式～布留式期の土器が多数出土している。さらに、下層の地表下2.3m～地表下2.9mの範囲の青灰色微砂層中より布留式土器片や弥生土器片が出土している。

5. 出土遺物

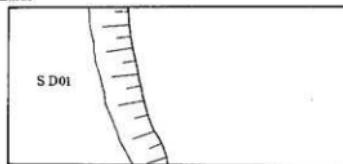
[第1区の出土遺物]

S X01出土遺物(1～10)：須恵器杯蓋(1・2)はそれぞれつまみを有する杯蓋

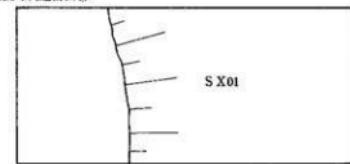


第37図 第1区断面図（南壁・1/40）

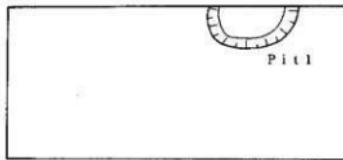
近世遺構面



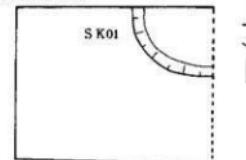
奈良時代遺構面①



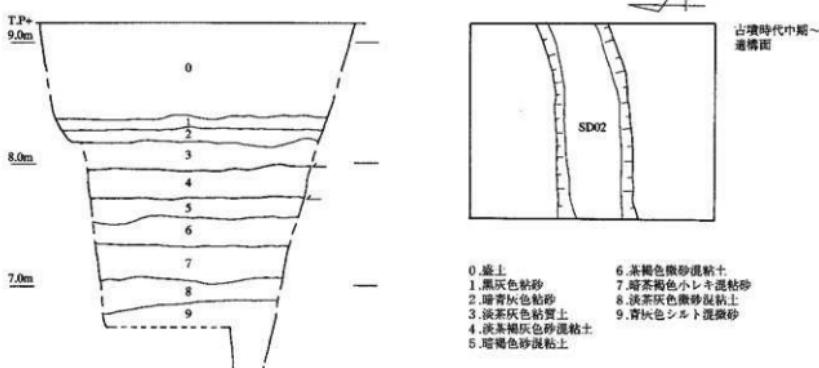
中世遺構面



奈良時代遺構面②



第38図 第1区遺構平面図（1/40）



第39図 第2区土層断面図及び遺構平面図（1/40）

であると考えられるが、つまみの部分は残っていなかった。須恵器杯身（3・4）は高台のない型式のものである。5～7は各種土師器皿で、中型（口径16cm前後）の皿（5・6）と大型（口径27cm前後）の皿（「盤」・7）の2種類がある。中型の皿に関しては暗文などは確認できなかった。土師器壺（8・9）はそれぞれ上半部の1/3が残存している。復元口径は8が約26cm、9が約19cmである。土師器杯蓋（10）は須恵器壺身の模倣したもので、つまみの部分のみ残存していた。

S K 0 1 出土遺物（11～14）：11・12は、それぞれほぼ完形の須恵器杯蓋で、II型式のもの（11・口径12cm）とつまみを有するIV型式のもの（12・口径17.2cm）と2種類の型式が見られた。土師器皿（13・14）は、口縁部端部の開くものとかえりを有するものが見られた。

[第2区の出土遺物]

S D 0 2 出土遺物（15）：図化できたのは1点のみで、15は須恵器碗で、1/2のみ残存していた。外面はロクロナデを施す。底部に「X」のヘラ記号がある。

S O 0 1 出土遺物（16～23）：16～22が上層の暗褐色砂混粘土層の遺物で、23が下層の青灰色微砂層から出土している。ただし、17の破片の一部が下層の青灰色微砂層から出土している。

16～20は壺の口縁部で、それぞれ分類できる。16は庄内式壺で、口縁部が上外方へ外反気味に伸び、端部はつまみ上げられている。残存率は1/8程度である。17は布留傾向壺で、やや屈曲するように外反する口縁を持つ。外面は、ヨコナデを施し、内面はヘラケズリである。18は吉備系壺で、口縁部が水平に立ち上がり、端部を長くつまみ上げる。口縁外面に沈線を有す。朱彩が施されている。19は布留系壺で、口縁部が上外方へ外反し、端部をややつまみ上げる。外面はほとんど摩滅しているもののハケ調整である。20は吉備系壺で、口縁部が短く水平に立ち上がる。残存部分が少ないため詳しいことは不明である。小型器台（21）はやや深めの皿状の受部とその脚部の一部である。受部の内面はヘラ磨きを施す。脚部は、まっすぐに広がる。直口壺（22）は口縁部のみ完存していた。ヘラ磨きした後横方向のハケを施し、内面はヘラ磨きを施す。壺の底部（23）は外面をナデ調整を施し、内面はヘラナデの痕跡を残す。

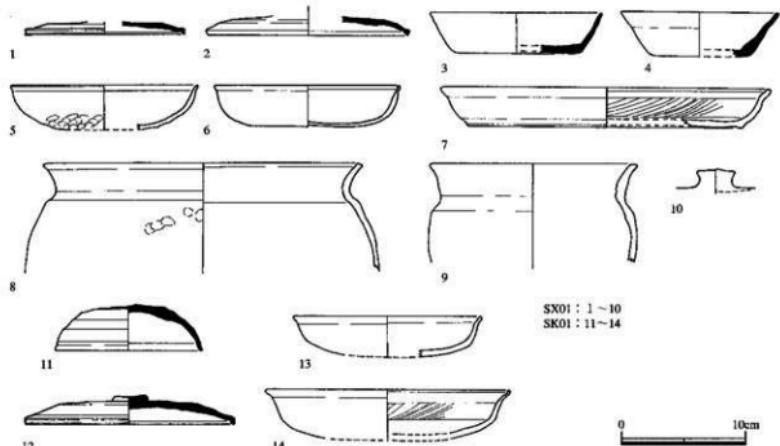
6. まとめ

二つの調査区で、それぞれ異なる時期の遺物包含層・遺構面を確認した。第1区に関しては奈良時代の遺構・遺物を中心としている。そして、第2区に関しては古墳時代中期と古墳時代前期後半の時期（庄内式新相～布留式古相）の遺構面を中心として各種の壺等が出土している。これらの結果は、（財）八尾市文化財調査研究会による周辺の既往の発掘調査（1次・4次・17次）と同様の成果で、これら該期の集落の存在を指摘できよう。遺物包含層に至る深さは、ほぼ共通しており、地表下1.3m以下地表下2.1mの範囲で層厚は約0.8mになる。

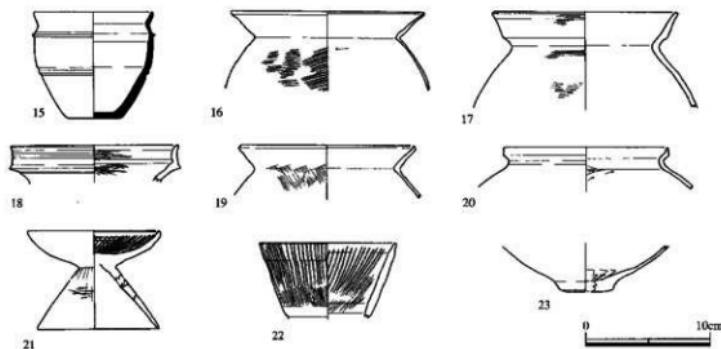
（藤井）

参考文献

- 高萩千秋 1987『小阪合遺跡 昭和57年度 第1次調査報告書』（財）八尾市文化財調査研究会報告10
高萩千秋 1988『小阪合遺跡 昭和59年度 第4次調査報告書』（財）八尾市文化財調査研究会報告15
(財)八尾市文化財調査研究会 1989「9小阪合遺跡（第17次調査）」「(財)八尾市文化財調査研究会年報
昭和63年度】



第40図 第1区出土遺物実測図（1／4）



第41図 第2区出土遺物実測図（1／4）

9. 太子堂遺跡（96-575）の調査

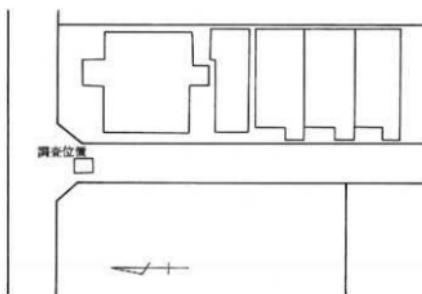
1. 調査地 東太子2丁目地内
2. 調査期間 平成8年12月9日
3. 調査方法 公共下水道工事に先立ち、人孔設置部分の1.5m×2mの範囲について、地表下約3mまでの遺構確認調査を行った。
4. 調査概要 盛土以下地表下1.9mまでは顕著な遺構・遺物は確認できなかった。そして、地表下1.9mから2.3mまでは、青灰色微砂層が続く。その直下から地表下2.6mにかけて、古墳時代前期の土器片を含む暗灰色粘土層を検出した。この層の一部には、多量の炭等を含む黒灰色粘土層が見られる。この層からは布留式壺の口縁（1）や煤の多量に付着した壺の体部片や手づくねによるミニチュアの小型丸底壺の完形品（2）などが出土している。のことから、何らかの遺構の覆土であると考えられる。この遺構の性格は不明であるが、焼土坑等の一部を検出した可能性が高い。
5. まとめ 今回の調査範囲では、遺構の全体像を捉えることはできなかったが、本調査区の西側で行われた調査（（財）八尾市文化財調査研究会調査：TS 90-2・TS 92-4）でも古墳時代前期（布留式期）の遺構面や遺物包含層が検出されており、該期の集落域の広がりを知る資料の一つとなるだろう。（藤井）

[参考文献]

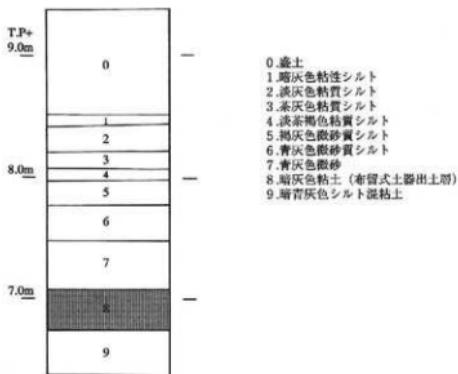
- 坪田真一 1993「II 第2次調査（TS 90-2）発掘調査概要報告」
『太子堂遺跡<第1次調査・第2次調査>』八尾市文化財調査研究会36
高萩千秋 1993「XVII 太子堂遺跡第4次調査（TS 92-4）」
『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告39



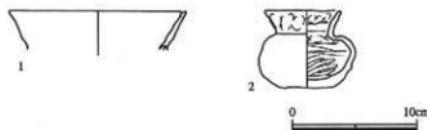
第42図 調査地周辺図 (1/5000)



第43図 調査位置図 (1/500)



第44図 土層断面図 (1/40)



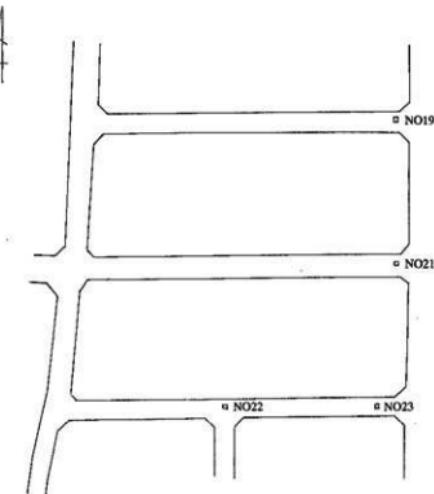
第45図 出土遺物実測図 (1/4)

10. 中田遺跡（95-22）の調査

1. 調査地 八尾市刑部2丁目地内
2. 調査期間 平成7年11月28日、平成8年1月25、26日
3. 調査方法 公共下水道工事（人孔設置）に伴い、遺構確認調査を行ない、それぞれ管底の深さまで、重機と人力を併用して掘削を行なった。
4. 調査概要 〔N 019人孔〕地表下1.0m前後まで、現代の盛土層である。地表下1.12～1.23mで、摩滅した土師器片を若干含む黄色斑灰色粗砂層を確認した。さらにその下の地表下1.5～1.72mで鎌倉時代の須恵器片、土師器片を含む灰黒色小礫混粘土層を確認した。
〔N 021人孔〕地表下0.5mまで現代の盛土層であり、地表下0.5～0.7mで旧耕土層を確認した。ここでは地表下1.0m前後で淡茶灰綠色砂混粘土層上面を切り込む幅1.0m以上、深さ1.0mを測る溝状の遺構を確認した。この遺構は調査区の北西隅にかろうじてかかる状況であった。この溝の肩には杭が遺存していた。埋土は淡暗灰綠色砂混粘土、暗灰色砂混粘土層である。埋土からは鎌倉時代の瓦器片、土師器片が出土した。
〔N 022人孔〕地表下0.7m前後まで現代の盛土層であり、地表下0.7～0.95mで旧耕土層を確認した。ここでは地表下1.3m前後の明灰茶色粘性砂質土上面で、幅1.1m前後、深さ0.6～0.8mを測る、北西から南東方向の溝状の遺構を検出した。溝の埋土は大きくみると、上層が暗灰茶色粘性砂質土、下層が暗灰色粘土層であり、鎌倉時代の瓦器片、土師器片が多量に出土した。この溝状遺構は南肩のみを確認したものだが、調査区内では肩部に低い段がつき2段となる。



第46図 調査地周辺図（1/5000）



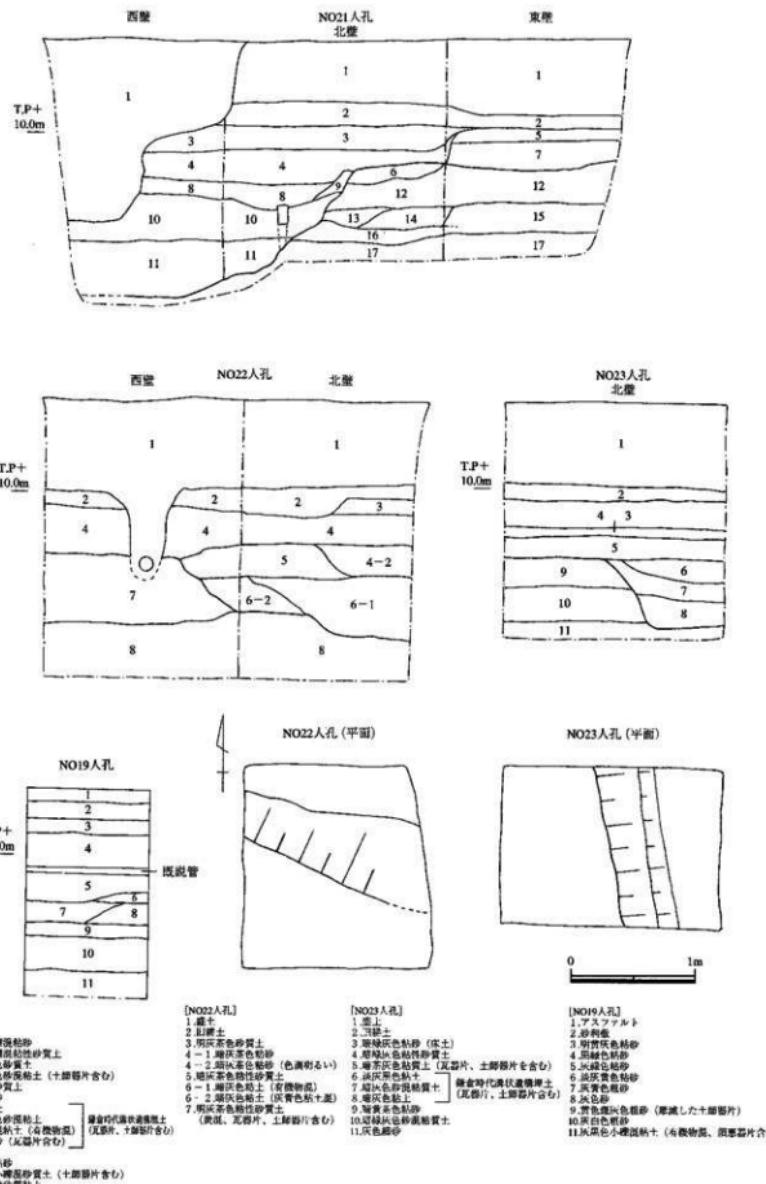
第47図 調査区設定図 (1/1000)

〔N 023人孔〕地表下0.68m前後まで現代の盛土層であり、地表下1.3mの暗黄茶色粘砂層上面で幅1.0m以上、深さ0.6mの南北方向の溝状遺構を検出した。埋土は淡灰黒色粘土層、暗灰色砂混粘質土、暗灰色粘土である。埋土には鎌倉時代の瓦器片、土師器片を含み、最上層の淡灰黒色粘土層の遺物量が最も多い。

6. まとめ

今回の調査では、N 021、N 023人孔で鎌倉時代の南北方向の溝を確認し、N 022人孔で同期の東西方向の溝を確認した。N 021人孔検出の溝埋土から出土した瓦器椀は、12世紀後半から13世紀前半に位置付けられる。N 022人孔で検出した溝の埋土から出土した瓦器椀は12世紀後半から13世紀前半のものがあるが、最下層付近で14世紀後半に位置付けられる瓦器椀が出土している。N 023人孔で検出した溝の埋土から出土した瓦器椀は小片であるが12世紀後半から13世紀に位置付けられるものである。これらの溝が同一のものであるかどうかは部分的な小調査のため判然としないが、屋敷地などを取り囲む溝になる可能性もある。

(吉田野乃)



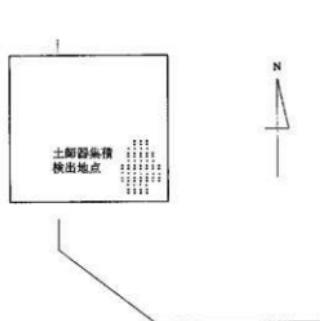
第48図 調査区平面図・土層断面図 (1 / 40)

11. 竹渕遺跡（94-478）の調査

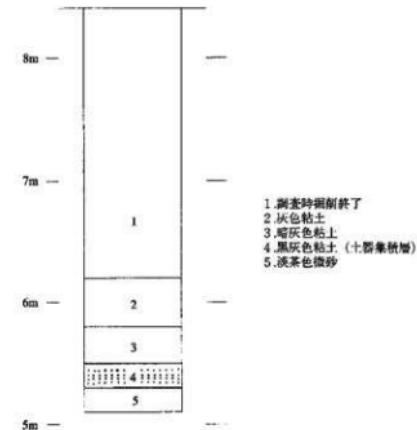
1. 調査地 竹渕1丁目地内
2. 調査期間 平成8年3月23日
3. 調査方法 公共下水道発進立坑（6.4m×6.4m）の構築に伴ない包含層が想定される深度を対象に立坑内の東西において夜間試掘を実施した。その結果地表下2.6m前後に植物遺体を多く含む層が現れ、それ以下約30cm～40cmに古式土器を含む包含層が存在しているのを確認した。取り分け立坑東側においては、地表下2.9m以下に布留式土器を多量に含む土器集積状の包含層を確認したため土器の採集を行い、写真撮影と柱状断面の実測等を行うこととした。
4. 調査概要 立坑の東側で検出した布留式の土器集積は、立坑南東部分を中心に拡がっており、黒灰色粘土内に完形品を含む濃密な包含状況を呈していた。ここより出土した遺物は遺物箱2箱分になる。しかし、立坑の西側では、希薄な包含層が認められるものの土器集積の拡がりはなく、遺構の存在も認められなかった。なお、土器集積の検出面の標高は、5.5mを測り、集積層の厚みは約20cm以上を測る。包含層以下の層はシルト層、粘土層が厚く堆積する。
5. 調査結果 立坑内で確認した布留式土器の集積は、古墳時代前期のものではあるが、時期的には同時期のものとして一括性が高く器種も揃っているので標識的な資料としても取り扱うことができるものであったが、夜間の試掘という悪条件のために遺構の性格が不明であることが惜しまれる。なお、ここで検出した布留式土器は、布留式期2の時期、つまりかつての小若江式の時期にあてることができる。（米田）



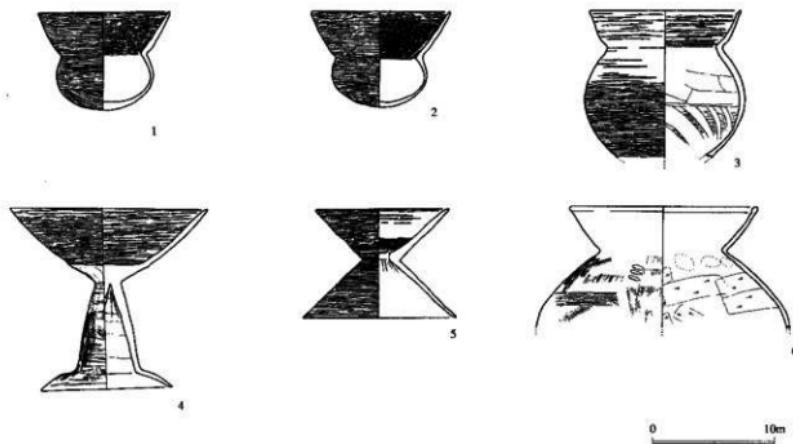
第49図 調査地周辺図（1/5000）



第50図 調査区設定図 ($S = 1/200$)



第51図 土層断面図 ($S = 1/40$)



第52図 土器集積出土遺物実測図

報告書抄録

ふりがな	やおしないいせきへいせい 8ねんどはくつちょうさほうこくしょ					
書名	八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書II					
著者名	平成8年度公共事業					
卷次						
シリーズ名	八尾市文化財調査報告					
シリーズ番号	37					
著者名	米田敏幸・酒井・吉田野乃・吉田珠己・藤井淳弘					
編集機関	八尾市教育委員会					
所在地	〒581 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎ 0729-91-3881					
発行年月日	西暦1997年3月31日					
所取遺跡名	所 在 地	コ 一 ド	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 (m ²)
	市町村	遺跡番号				
跡部遺跡	大阪府 八尾市 跡部本町3丁目	27212	34° 36° 45°	135° 34° 55°	19960529	4
跡部遺跡	八尾市 東太子	27212	34° 37° 25°	135° 35° 25°	19960704	12
積松南遺跡	八尾市 蒲積松町	27212	34° 36° 25°	135° 35° 15°	1996125,26	64
若原遺跡	八尾市 若原1丁目	27212	34° 36° 15°	135° 36° 25°	19961017	6
大竹遺跡	八尾市 大竹5・7	27212	34° 38° 15°	135° 38° 35°	19960726 0806	12
柴音寺遺跡	八尾市 柴音7丁目	27212	34° 38° 15°	135° 38° 35°	19960109	10
久宝寺遺跡	八尾市 久宝寺前及 び籠井	27212	34° 37° 15°	135° 35° 15°	19960109～ 0712	240
小阪合遺跡	八尾市 青山町4丁目	27212	34° 37° 10°	135° 36° 35°	19960905,06	9.5
太子遺跡	八尾市 東太子2丁目	27212	34° 36° 45°	135° 35° 30°	19961209	3
筋田遺跡	八尾市 筋田2丁目	27212	34° 36° 45°	135° 37° 25°	19951128 19960125,26	16
符浦遺跡	八尾市 符浦1～4 丁目	27212	34° 37° 50°	135° 34° 10°	19960323	40

所収遺跡名	所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
跡部遺跡	集落	奈良時代末	遺物包含層	土師質小型壺	
跡部遺跡	集落	古墳時代前期	落ち込み状遺構	庄内式土器・布留式土器	
植松南遺跡	集落	古墳時代前期	遺物包含層	土師器・弥生土器・須恵器	
志原遺跡	集落	中世～近世	溝・遺物包含層	瓦器・土師器	
大竹遺跡	集落	古墳時代後期～中世	堤	土師器	
樂音寺遺跡	集落	古墳時代	周濠		
久宝寺遺跡	集落	弥生時代～近世	溝・河川・土坑・井戸	弥生土器・古式土師器・須恵器・土師器・瓦器	
小阪合遺跡	集落	古墳時代前期～奈良時代	溝・土坑・ピット	庄内式土器・布留式土器・須恵器・土師器	
太子堂遺跡	集落	古墳時代前期	遺物包含層	土師器	
中田遺跡	集落	中世	溝	土師器・瓦器・須恵器	
竹渕遺跡	集落	古墳時代前期	土器集積	布留式期IIの土器	

図 版

調査風景
その1
(西より東を望む)



調査風景
その2
(第15区)



調査風景
その3
(第15区)



第 5 区
庄内式甕出土状況
(河川堆積中)



第 7 区
流木出土状況
(NR701)



第 8 区
布留式甕出土状況
(河川堆積中)



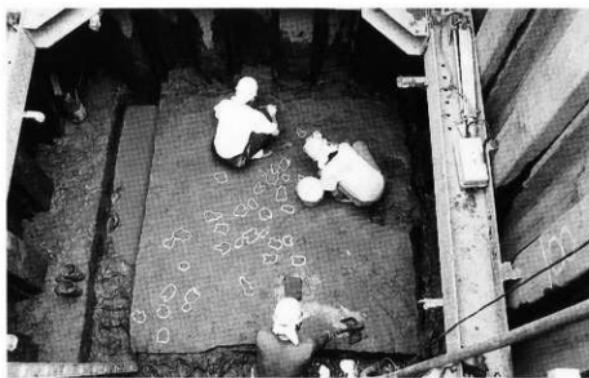
第9区
須恵器出土状況
(SD901)



第11区
弧状溝検出状況



第15区
調査風景



第1区
掘削風景



第1区
土篩器皿出土状況
(SX01)



第1区
SK01土器
出土状況



圖版 5 久寶寺遺跡（95—565）出土遺物



8-4



9-3



9-4



12-1

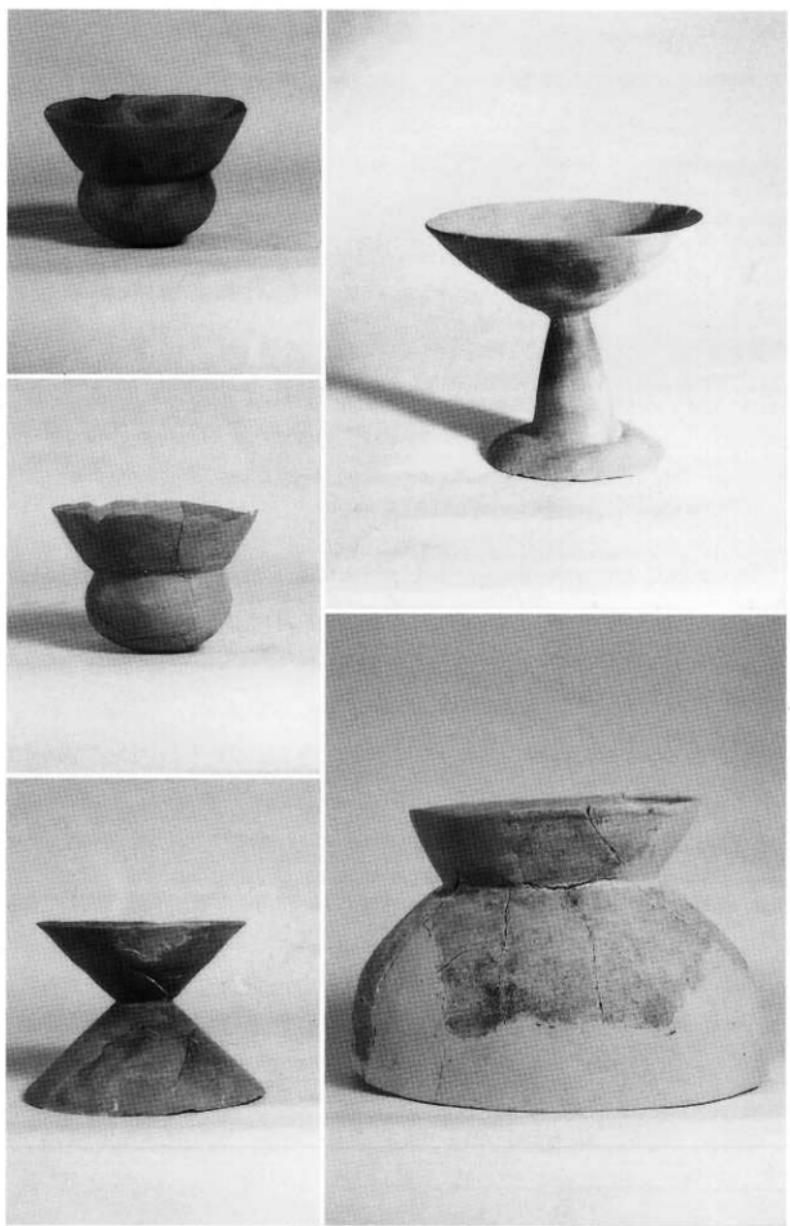


13-1



15-1

圖版 6 竹灣遺跡（94—478）出土遺物



八尾市文化財調査報告37
平成8年度公共事業

八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告Ⅱ

発行日 1997年3月

発行所 八尾市教育委員会

印 刷 佛近畿印刷センター

